Hope

Fun

Support

Encounter

聖学院大学ボランティア活動支援センター
2019 年度事業報告書

Seigakuin Volunteer Support Center Report 2019

Love

Change

Exchange

Smile

『受けるよりは与える方が幸いである』

―新約聖書　使徒言行録　第20章35節

刊行によせて

聖学院大学ボランティア活動支援センター　所長
政治経済学部　教授
平　修久

2019 年度も、ボランティア活動に関心のある新入生を多く迎え、活動の質、量ともに充実することができました。ボランティア活動支援センターの重要な役割の一つが、ボランティアのニーズと活動希望者のマッチングですが、その年間件数が 413 件となり、昨年比 11.6%増でした。学生の熱意もさることながら、受け入れて下さったり、活動を後押しして下さった方々のお蔭様と感謝いたします。

ボランティア・まちづくり活動助成の申請も 15 件と過去最多を記録しました。良い意味での活動の競い合いになったと思います。幸い、赤い羽根共同募金からの助成金も頂き、公開審査会後の寄付金も増えました。審査には、募金活動に参加した中学生 4 名も加わってもらい多くの質問も頂きました。また、助成金を受領した学生たちは、自分たちの活動と SDG s との関係を学ぶ研修を受け、熱心に活動を展開しました。

岩手県釜石市での活動は、前年度末に発行した『釜石での出会いから始まった』をお届けすることから始めました。7 月には、2011 年から継続している復興支援活動に関して、釜石市長より感謝状を直接頂きました。8 月の釜石へのボランティアスタディツアーでは、リーダーの学生・高校生による企画を実施するとともに、障がい者との交流も初めて行いました。11 月の学園祭において釜石フェスティバルを実施し、釜石から宝来館の岩崎昭子女将をお招きしての講演とパネルディスカッション、釜石の物産展などを実施しました。ラグビー・ワールドカップの釜石開催もあり、多様な活動を通じて釜石とのつながりを強めるとともに、防災意識を高めました。

また、関東地方を襲った台風 19 号の影響で、埼玉県内でも災害復興ボランティアのニーズが発生し、学生たちは泥かきなどに汗を流しました。

これらのボランティア活動の体験を、聖学院中学校 1 年生の総合学習 LLT(Learn Live Together)において、学生が中学生に熱く語りました。

以上のように、一つの活動が他の活動につながるとともに、学生は問題意識を発展させ成長しています。今後とも、学生のボランティア活動に対するご理解、ご支援、ご指導をお願いいたします。

目次

刊行によせて ……3

ボランティア活動支援センター　　所長　平　修久

特別編集　講演会「生き続けるということ」

―宝来館　女将が語る　釜石のあの日・今・未来― ……6

新入生のボランティア意識調査

―「2019 年度ボランティア活動に関わるアンケート」から― ……28

センター年間行事一覧 ……33

各事業報告 ……35

1. **ボランティアの人材育成とその担保に関する事業** ……36
   - （1）　学内ボランティア団体の育成支援
   - （2）　学生サポートメンバー養成講座（８期）の実施
   - （3）　視野を広げるボランティア教養講座の実施
   - （4）　「学生ボランティア対象 SDGs 研修会」の実施
2. **学内の諸ボランティア活動の連絡、協力および支援に関する事業** …… 41
   - （1）　学生サポートメンバー（サポメン！）との連携
   - （2）　ほたる祭りの実施
   - （3）　授業等への協力
   - （4）　ボランティア・まちづくり活動助成事業の実施
   - （5）　聖学院大学復興支援ボランティア交通費補助金
3. **復興支援ボランティア事業** …… 52
   - ボランティアスタディツアー「よいさっ！プロジェクト６」参加レポートより
   - （1）　東日本大震災復興支援ボランティアスタディツアーの実施
   - （2）　釜石「キッズかけっこ教室」の実施
   - （3）　釜石の高校生×聖学院生による釜石○○プロジェクトの実施
   - （4）　釜石フェスティバルの実施
   - （5）　「東日本大震災復旧・復興支援活動フォーラム」における感謝状贈呈について
   - （6）　「釜石での出会いからはじまった」の発行
   - （7）　「東日本大震災を覚えて～礼拝と集い～」の実施
   - （8）　台風 19 号被害に対する対応について
   - （9）　関連機関との連携
4. **学外のボランティア情報の紹介とその活動の支援に関する事業** …… 67
   - （1）　ボランティアコーディネート業務
   - （2）　「ボラフェス！2019」の実施
   - （3）　地域イベントへの参画
   - （4）　行政、市民活動団体との連携事業

（5）　学外団体からの相談対応
（6）　コーディネーターのスーパーバイズ
5.　ボランティア活動の記録と広報に関する事業..... 74
（1）　ボランティア情報の発信（メルマガ・LINE@/ホームページ・facebook・掲示板）
（2）　ボランティア活動支援センター広報活動
6.　その他の事業..... 76
（1）　視察・研修記録
（2）　視察対応・活動発表・講師対応・外部委員
（3）　学内他部署との連携
（4）　法人内での連携
（5）　他大学との連携
資料集..... 81
（1）　ボランティア活動支援センター内規
（2）　ボランティア活動支援センター運営委員一覧（2019 年度）
（3）　ボランティア活動支援センター運営委員会協議事項
（4）　メディア出演・掲載
（5）　広報ポスター各種

特別編集 講演会「生き続けるということ ～宝来館 女将が語る 釜石のあの日・今・未来～」

聖学院大学では、キリスト教理念に基づき 2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災直後より様々な支援活動を行ってきました。特に岩手県釜石市の皆様と、出会い・学び・語り合う関係性を深めてきました。

復興支援のために訪れたはずの学生たちは、厳しい状況の中で復興に向けて力強く前を向いて歩んでいる釜石の人たちから、逆に勇気と力と深い学びを与えられています。こうした関係を積み重ねる中で、2014 年 1 月 29 日には大学と釜石市の連携協定を締結するに至りました。(2019 年 7 月には、釜石市長より直接感謝状をいただきました。) そして、活動を行う中で釜石に魅了された当時の学生たちは、2015 年 11 月の学園祭 (ヴェリタス祭) において、初となる「釜石フェスティバル」を開催しました。その先輩たちの想いを引き継ぎ、先輩たちと同じように釜石に魅了された後輩たちが第 2 回目となる「釜石フェスティバル」を今年度の学園祭で開催しました。

この講演会は、「釜石フェスティバル」の中核的なイベントとして実施されました。本学が釜石での活動を始めた 2011 年の冬より、今なお継続的にお世話になり、活動を応援していただいている「浜辺の料理宿　宝来館」の岩崎昭子女将をゲストにお招きし、「釜石のあの日から今を」テーマに女将の震災以降の歩みと、本学とのつながりについて語っていただきました。

また、後半では釜石を訪れて活動を行っている学生を交え、「釜石を通してみる～私たちの未来～」をテーマに対話の場を持ちました。

開催日時:2019 年 11 月 2 日(土)14:00～15:40
場　　所:聖学院大学チャペル
主　　催:聖学院大学政治経済学部／聖学院大学ボランティア活動支援センター
共　　催:釜石市

◆ゲスト

岩崎　昭子氏
浜辺の料理宿「宝来館」女将

岩手県釜石市の根浜海岸で、先代がはじめた「宝来館」を 20 代半ばで継ぎ、現在に至る。東日本大震災では旅館も壊滅的な被害を受けたが、日本・世界各地からの応援もあり、2012 年 1 月に再オープン、2015 年 4 月にはリニューアルオープンした。本学では、釜石市で復興支援活動を開始した 2011 年秋からプログラムの実施や現地学習等でお世話になっている。

◆パネリスト

富永　湧介
聖学院大学政治経済学科 2 年

入学直後に聖学院大学復興支援ボランティアチーム【SAVE】に所属し、釜石市での活動を継続している。また、今回の釜石フェスティバル実行委員会では、共同代表を務めた。

楢原　郁奈
聖学院大学児童学科 4 年

入学直後に聖学院大学復興支援ボランティアチーム【SAVE】に所属し、釜石市での活動を継続している。また、2018 年度より地元高校生と釜石のまちの活性化に取り組む「釜石〇〇プロジェクト」に参加し、高校生の企画応援にあたっている。

◆総合司会

平　修久　聖学院大学ボランティア活動支援センター所長／副学長

◆「釜石フェスティバル」、岩崎女将の紹介

伊藤みさき　聖学院大学こども心理学科 3 年／釜石フェスティバル実行委員会共同代表

◆パネルディスカッション司会

永松　実梨　聖学院大学ボランティア活動支援センターコーディネーター

趣旨説明

平　：皆さん、こんにちは。ヴェリタス祭の一番いい時間帯にお集まりいただきましてありがとうございました。それでは、只今から「生き続けるということ～宝来館女将が語る　釜石のあの日・今・未来～」講演会を始めさせて頂きます。本日の司会進行を務めさせていただきます、政治経済学部の平と申します。聖学院大学ボランティア活動支援センターの所長も務めております。よろしくお願い致します。

本日の講演会は、聖学院大学として 2011 年から釜石の地を訪問させて頂いておりますけれども、その活動の中でお世話になっております宝来館の女将の岩崎さんをお招きしました。

それでは最初に、本日の趣旨説明を釜石フェスティバル 2019 実行委員長のこども心理学科 3 年、伊藤みさきより説明させて頂きます。伊藤さんよろしくお願い致します。

伊藤：皆さんこんにちは。先ほど紹介して頂きました、こども心理学科 3 年の伊藤みさきです。釜石フェスティバルの共同代表を務めております。

このフェスティバルでは、釜石とつながりのある学生が集まり、釜石の魅力を発信したいという想いから立ち上がりました。スタディツアーなどの活動を通して、実行委員の一人ひとりが、釜石に関することや考えたことなどを、様々な形で発信しています。出店している模擬店では、私たちの大好きな釜石の食を味わうことができ、活動展示では震災から現在に至るまでの私たちと釜石との歩みを伝えるために、一人ひとり、自分なりの表現をカタチにしました。また、このフェスティバルをきっかけに、釜石とより多くの人とが繋がり、支援する、される、という垣根を超えていくため、釜石の方々の生の声を届けたいと思い、この講演会を企画しました。

岩崎昭子さんは、東日本大震災で津波に飲み込まれたものの、奇跡的に生還されました。ご自身が経営されている宝来館も津波にのみ込まれましたが、その後再建し、今も宝来館を守り続けています。聖学院大学とは、2011 年から交流があり、スタディツアーで訪れると、女将さんは私たちをいつも温かく受け入れてくださり、震災当時の話や女将さんの描く釜石の夢を語ってくださいます。女将さんは、いつも明るく元気で、その前向きな姿勢と明るい笑顔が印象的です。その温かさと力強さに、私たちはいつも魅了されています。

今日は、釜石のあの日・今・そして未来、という時間の流れを追いながら、女将さんの言葉を通して一緒に私たちの未来について考えたい！そう思い、女将さんをお招きしました。女将さんの言葉を一人ひとりが受け止め、生き続けるということについて、向き合える時間にできたらいいなと願っています。

平　：それでは、女将さん、よろしくお願い致します。

講演会

「3.11　あの日　あの時」

すいません、釜石から来ました、宝来館女将の岩崎昭子でございます。とても丁寧に紹介して頂いて。女将は、あの、普通のただ

ちっちゃな宿の女将なもんですから、とても講演の先生みたいなお話はできないのですが、2011 年から聖学院の学生さんたちが来てくださって、ずっとこうやって一緒に歩ませて頂いたな～という風に思っておりまして。学生さん達が成長していくのを見ながら、私たちも成長させてもらいました。

今日、4 年ぶりのこの会を、当時の学生さんが、また釜石フェスティバルとして、もう一度、こうゆう会をやりましょう！と、そして、自分たちがその会をやったことで、色んなことを勉強したこと、後輩のみんなにも経験してもらいたいと、今日のこの日に招いて頂いて、先輩方が後輩のみんなにこのフェスティバルのやり方等を一緒に考えている様子を見させていただいたら、本当に、よく成長してくれて、こんなに愛情があって、後輩たちを育てて…という、そのことに今日は感動させてもらっておりました。

また、私たち釜石市民より、今では釜石のことを一番知っていらっしゃるのはもしかして聖学院の先生方かもしれないです。それだけこの 8 年、聖学院の皆さんは釜石に寄り添って私たちの成長を見続け、助けて頂いてきたなあと実感しております。相変わらず、同じ話をするかもしれないですけど、付き合ってください。

今、学生さんが「2011 年に宝来館に集まってきて、それから立ち上がった物語です。」という風にお話して頂きましたので、最初に始めるのは、すいません、ちょっとショッキングな 2011 年の、宝来館に来た津波の映像から、流させて頂こうと思っているのですが、お小さい方、大丈夫ですかね？津波の映像見て頂いても？この映像は全員助かっていますので、撮った本人も、いま後ろの方におりますが、三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤聡君が撮ったものです。ちょっとショッキングかもしれませんが、全員生きているので、心配しないでくださいね。じゃあ、この映像から始めさせて頂きます。

【映像：宝来館に津波が押し寄せた様子】

初めてこの映像を見た方、いらっしゃいますか？

（会場の約半数が挙手）

あ、半分は初めてで…すいません、ちょっとショッキングだったと思います。毎年 3.11 になると結構ニュースで流されます。全員助かっているということで流してもらっている映像ですけれども。（映像を）振り返って説明しますと、緑のエプロンをしているのが私でございます。

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に地震があった時に、あの時の私の判断は、「今日は皆さん、山に逃げましょう」って言いました。私たちの三陸では、明治 29 年にも明治三陸大津波、昭和 8 年にも三陸大津波。9 割の確率でもう一度三陸大津波が来ますよ、と、言われていました。あの、3 月 11 日 14 時 46 分に「今日は皆さん外に出てください」と言いながら、フロントのみんなはラジオを持ち、救急箱を持ち、その日のお客様のスケジュールを持って、そして、隣近所の皆さんも集まってきて、私がその時みんなに言った

のが、「今日は皆さん、山に逃げましょう」と言いました。

この宝来館の建物は、平成7年の11月にわたくしが味気のない四角いこの鉄筋コンクリートの宿を建てました。宝来館は、昭和38年にわたくしの両親が始めているのですが、2階建ての木造のあたたかい、ひなびたいい民宿だったと思います。でも、この味気のない建物にしたのは、北海道南西沖地震、それから阪神・淡路大震災、その二つの地震があった時に、宿っていうのは、人の命を守らなくちゃいけない！と思ったのですね。その思いでどうしても丈夫な建物を建てたいと思い込んでしまって、この白っぽい右端の建物を建てたのは私です。

皆さん、3月9日にNHKで「崖っぷち女将」ってやった番組、NHK特集を見られた方いませんか？

（会場の数名が挙手）

すいません、ありがとうございます！被災地の8年目は借金だらけで大変だよ～っていう番組に出させて頂いたのですが、崖っぷちは、震災のせいではなくて、平成7年に、人の命を守れる建物を建てたいと思いこんだその時に、大借金をしまして。崖っぷちはその時で、震災のせいで崖っぷちになったのではないのです。法律通りに丈夫な建物を建てたので、宝来館は防災ビルという認定を受けるのですが、そんな想いで建てた宝来館に、あの3.11の時、私は、一つも、建物の中に居たいと思わなかったのです。

「今日はみなさん、山に逃げましょう」って言ったのです。それは地域のみなさん、それからわたし、漁師さんに嫁いでおりましたので、漁師さんのひいおばあちゃんは、昭和8年の時に9人の子どもがいて、そして両手にこどもの手をとって。「後ろから何人ついてきたか数えなかったよ。ただただ、山に向かって走ったんだ。」、と。ひいおばあちゃんがそういう風に教えてくれました。この丈夫な建物を建てたいと思って建てたときに、念のため、山の後ろに避難道をつくっていたのですね。あの時、一つも建物の中にいたいと思わないで、今日がひいおばあちゃんたちから教わっていた、「山に逃げる日」と思ったのですね。で、「みなさん、今日は山に逃げましょう！」と、逃げて。でも、宝来館は避難ビル、防災ビルに認定されておりましたので、私たちが逃げた後に、町内会の皆さんは駐車場に集まってきて。うちの優しいスタッフが、「女将さん、迎えに行きます」って言ったのですね。

それで、スタッフと一緒に山を下りて、「今日は皆さん山に逃げましょう！」と誘っていた時の映像を、伊藤君が13mくらいの地点で、スマートフォンを構えていたところに、偶然私たちが逃げていった。本人はそういう映像を撮るつもりではなくて、津波がどうくるかというのを構えていた時に、走っていったのですね。この映像があることで、宝来館は大変有名になりますので、なんかこう、決められていた、こういう風に撮るということを決められていたんじゃないかと。ちょっと語弊があるので誤解させちゃいけないのですが、なんか、この映像が有名になったので、またこの映像があることで、伊藤君の人生も、それからここで一生懸命生きようとする宝来館が色々メディアさんに取り上げてもらうということの始まりだったと思います。こういうことがありました。全員生きております。

次にスタッフの廣田君のスライドを…。これ、うちのスタッフが作った、ラグビーワールドカップ誘致を目指すまちづくりまでの報告でございます。

【スライド：震災前の宝来館周辺】

これが震災前でございます。宝来館は松林の中に、こんもりとした山と松林の中に何軒か建物があるのですが、このあたりに宝来館が建っています。岩手県で 2 番目に広い海水浴場の根浜海岸と申します。大槌湾に面しております。白砂青松 100 選に選ばれた海岸で、私たちの村は根浜という集落で 170 人弱、67 世帯が住んでおりました。この、川の、蛇行した川のところに 2 つの学校があったのですね。釜石東中学校、鵜住居小学校でございます。

【スライド：震災後の宝来館周辺】

津波がきまして、そして、目の前の砂浜はなくなりました。地盤沈下７０ｃｍしていると言われております。学校があったところや、私たちの村は壊滅状態になりました。宝来館の前の松林だけ残りました。釜石は、99.8％の子ども達が助かっているのですが、防災教育をしていたからと言われております。その防災教育のはじまりが、この釜石東中学校だったのですね。

世界は、この日、釜石の子ども達の行動を、「釜石は海のそば、川のそばなのに奇跡的なことが起こったぞ、みんな助け合って生きているぞ！」という風に表現されました。ですが、この近くで、この白い建物、釜石の、後に悲劇と呼ばれる、鵜住居防災センターという建物がありまして、200 人以上逃げて、生き残ったのは 34 人だけ。悲劇という言葉がとられるんですね。奇跡と悲劇がこんな近さにあるんですね。で、この二つの物語は、今は「釜石の出来事」という表現になっております。自分達だけ奇跡って呼ばれることは、家族を亡くした子ども達にとってはとてもつらい言葉に思えたかもしれないですね。2011 年の夏くらいから、この二つの物語は「釜石の出来事」という表現になっております。

【スライド：震災当時子どもたちが避難した道のり】

防災教育で逃げた子ども達は、ございしょの里に逃げて、山が崩れているのを、「こんな山が崩れるような地震は初めてだぞ」とおばあちゃんたちに言われて、一週間前、3 月 6 日にできたばかりの三陸道まで逃げた、という物語になりました。

【スライド：宝来館】

先ほど言った、人の命を守れる建物にしたかったという宝来館。2011 年のそのあとに周りを片付けて、復興しなくちゃいけないなと思いまして、当時、宝来館一階は浸水しておりますので、2 階もベランダまで津波は来ました。でも、躯体（くたい）は残りまして、なんか、建物にも命があるように思ったのですね。自分達も、あの、3.11 の時に、私も津波にのまれたものですから、なんか、命もらったな、という気持ちなのですね。こう、生き残ったというより、新しく命をもらった気持ちなのです。それで、壊れた

宝来館を見たときも、宝来館が、一つの人間のように見えてきまして、なんか「生きたい！」とこの建物も言っているなぁと、思えて仕方がなかったのですね。

3 月 11 日から 3 月 26 日まで、避難所をさせて頂いて、この建物を生かしてやりたいなあと思うようになります。きっかけは、私たち避難所をしているときに、青森の電気工事に来ていた皆さんが、ある会社の、社長さんではなくて役員さんだったそうなんですけれど、「女将さん、避難所をもし解散するのであれば、解散したあと、電気もつかなくてもいい、水も出なくていいので、自分達を泊めてくれないか？」と。毎日、復旧の工事に来ていて、トラックで足を曲げて寝ているんだ、と。電気もつかなくてもいい、水も出なくてもいいから足を伸ばさせてくれないかと、その方に言われまして、電気工事の方に。「あ、こんな壊れた宝来館でも、必要としてくれているのか！」と。必要とされることが…生きる勇気だったのです。この建物が、必要だって言われたら、私の女将という頭にパチッとスイッチが入りまして、「必要とされることを私やりたい！この建物に対してやりたい！」と思ったのを覚えております。

「ラグビーのまち釜石でワールドカップを」

【スライド：ラグビーワールドカップ釜石開催決定時】

で、えー、そういう活動をしながら、なんと釜石はラグビーの町でした。2015 年、4 年前に、まず、日本でラグビーワールドカップ開催が決まりました。4 年前のロンドン大会の時に、日本全国 12 か所、ラグビーをどこでやるか会場が決まったのが 4 年前でした。鵜住居周辺で人が集まれた建物は宝来館だったので、宝来館で釜石の皆さん、特に、こどもたちも集まって、私たちは、ラグビーの町だったので、釜石でラグビーワールドカップをやってほしいという想いを、市民活動として始めるのですが、これ、決まった瞬間、2015 年の 3 月 2 日の写真でございます。

釜石はかつて 7 年連続ラグビー日本一になった町です。神戸製鋼さんが日本一 7 年続けるのですが、その前日本で 7 年連続日本一だったのは、釜石なのです。釜石はラグビーで一つになろうという時代があったのです。釜石 7 連覇が始まる頃は、人口は 8 万人くらいあったと思うのですが、釜石は鉄の町で、製鉄所さんの、企業城下町でした。その企業が、合理化をするということが発表になりますね。高炉が休止になると。鉄の町で、高炉がなくなるということは、企業

が存続するかどうかの本当に大事な問題なのです。製鉄所さんがなくなるのではないかという危機感の時ですね。ラグビーが好きで、北海道や東北からラグビーをする高校生たちが集まってきて、そこに明治大学から松尾雄治さんとか、素晴らしい選手を呼んで、ラグビーを強くするという釜石が始まった時にちょうど合理化の発表があって。歴史が始まるのは、実はこのときなのです。

合理化が決まって、それぞれが全国に散らばるというスケジュールが始まりますので、負けてしまったら市民ががっかりするぞ、と、それで負けられなくなった歴史が始まったのが、ラグビー日本一をした釜石の裏の物語だったなーと、振り返って思います。その中で合理化があって、それでも釜石の町は、色々なことに挑戦しながら生きてきたという歴史がありますが、2011 年 3 月 11 日大津波が来ました。

当時 7 連覇を経験した皆さんが、日本でワールドカップがあるのであれば、釜石でやろうよ！と、スクラム釜石というのを立ち上げて、活動を始めてくださるのです。日本でやるけれども、その一つは釜石でやろうよと、最初言って下さったのは、亡くなった平尾誠二さんだと、お聞きしております。7 連覇を経験した皆さんがスクラム釜石っていうのを立ち上げた時に、7 連覇を経験した釜石に残っている選手の皆さんがその話を聴いて、「今の釜石に、ラグビーのラの字、ワールドカップなんて言えないぞ」と、生きるのが精いっぱいなんだ、と。そこにラグビーの話を自分達が言えないと、釜石に残っている選手の皆さんはそう答えたとお話を伺っております。確かにそうだったと思います。

明日、自分達はどうなるのか、というのも見えない中でワールドカップを目指すっていうことは、とても、誰も、自分の方から口に出して言えない言葉だったのですが、実は 2011 年 3 月 26 日に避難所を解散し、そして私は 4 月 17 日だったと思うのですが、うちの従業員さん達、スタッフを全員解雇するということをしました。国の制度は色々なものをつくってくださったのですが、それでは、宝来館は元々給料が安いので、みんなの保証ができないので、伊藤君と相談して、「女将さん、失業保険をもらうしかないです」と決断をしていました。

4 月が過ぎて、5 月の連休が始まる頃に、ラグビーの関係者の方が来ました。「女将さん、この根浜の風景は、オーストラリアにあるラグビースタジアムの風景に似ているんだよなぁ。海から入ってくると、緑がばあーって広がっていて、素晴らしいスタジアムがオーストラリアにあるよ。2019 年にはワールドカップを日本でやるんだ。釜石はラグビーの町だから元気だしな！」って、かつて日本代表選手をなさった岩手県出身の笹田さんという方が訪ねていらして、松林に立っている私に声をかけてくれました。

その時私は、「だったら釜石でやってけれ。」って言ったんです。なんか、生きる希望がほしかったのです。目標がほしかったのですね。従業員さんを全員解雇して、でも、どうにか、早く、宝来館を再生して、みんなが戻ってくる状況を作りたいと思っていた時に、なんかその、きっかけがなければ、この私自身にも、頑張ろうという、出発にならなくて。本当にワールドカップをやりたいというより、歩くためのきっかけが

ほしい、という想いでした。ですから、2015年3月2日に決定した瞬間、わたし喜んでますでしょ？でも半分は皆さん、おなかの中で、「決まってしまった…どうしよう！」と思ったのですよ。なんかすごくこう、嬉しいけども、どうなるのだろうという不安がいっぱいの、実はこれ、顔ですねー。

【スライド：釜石鵜住居復興スタジアム】

そして8年が過ぎていきました。そこまでの間、実は私たちは、ワールドカップを目指そう、それから、松林を守ろう、植物を育てよう、砂も足さなくちゃいけないぞ、一時、私たちの村は全部壊滅したので、上流の橋野鉄鉱山の方に古民家があって、じゃあ古民家も再生して、山の方からスタートしようかと、色んな想いを、「どんぐりうみねこ村」という村の名前をつけて、こんな生活をしたいですというのを言葉に書いていたのがあったのですが、最初に思ったことは、自然学校がほしいな、NPOがほしいな、そして先ほど言った松林や色んな再生したいなという、最初に考えたことは、実は自分でやったことではないのですが、こうやって外から聖学院さんや色んな皆さんが被災地に、私たちのところに訪ねてきてくださいまして、結果、最初に考えた村づくりの想いは、実は私としては100%行動にできて、進んでいったなあと思っております。

「希望を持つきっかけとなった“桜プロジェクト”」

聖学院の皆さんが、桜プロジェクトとして私たちの村に最初来てくださったときに、これは村全体、また、釜石全体を元気づける大切な始まりでした。色んな桜プロジェクトがあるのですが、成長した桜を、空き地に、植えていいところに復興の目印として植えるという桜プロジェクトはあるのですが、聖学院の皆さんがやってくださったのは、仮設にいる私たちのところに、盆栽桜を届けて、仮設の狭いちっちゃな部屋でも愛でて見ることができて、そしてその仮設を私たちが出て自分の家に戻った時にそのお庭に植えて成長する…。そういう桜プロジェクトの案を持ってきてくださったのですね。振り返れば、聖学院の皆さんがしてくださった桜プロジェクトが一人ひとりに、希望を持たせるきっかけでもありました。自分達だけではなくて、みんなで一緒に元の故郷に戻ろうよ、という想いにさせてくださった、聖学院の皆さんがやってくださった桜プロジェクトはそういう意味があったと振り返ります。

「みんなに届けたい“ありがとうの手紙”」

【スライド：鵜住居地区の現在の様子】

で、これ、（スライドさして）今でございます。学校跡地にはスタジアムができました。ここにあった学校は高台に移転して、そこには、中学校、小学校、幼稚園ができました。JR山田線は8年間不通でございました。それがこの3月に、三陸鉄道として開通しました。9月にワールドカップがある、鉄道

も通る、そういうことが色々始まる。今年の春は素晴らしい幕開けだったなぁと思っております。

9月25日には、素晴らしいワールドカップを経験させて頂きました。私4年前にロンドン大会に行ったのですけれども、グロスターという小さな町の大会を見に行きまして、あったかいワールドカップを見てきたのですね。あ、こういうワールドカップだったら私たちのところでもできるかもしれない！と思って4年前帰ってきました。この9月25日に釜石で経験したワールドカップはその10倍以上、何十倍というくらい、本当に素晴らしいワールドカップを見せてもらいました。経験させてもらいました。みんなで頑張ってきた、用意してきたっていう、その繋がりが、その関係がすごく財産だと思ったのです。そして経験させてもらった25日は本当に素晴らしかったです。最後に、その日、小学生・中学生が合唱した「ありがとうの手紙」という合唱曲を聞いてもらいたいと思うのです。ワールドカップは、本当に、私たちに色んなプレゼントをくださったなあと思っております。

次の10月13日は残念ながらワールドカップ2試合目は台風被害で中止になりました。でも、この鵜住居スタジアムの運命かなあとも思いました。自然災害が起こるっていうときに中止という決断をするのが、このスタジアムらしい決断だっただろうなぁと。今、自然災害は、東日本の私たちだけではなくなりました。日本全国、いたるところで起こるという、自然災害だらけの日本になってしまいました。その中で、色々な決断がこれからもあるのだろうなと思います。今から釜石の小学校・中学校のこどもたちが、10月13日に歌えなかった、聞いてもらえなかった「ありがとうの手紙」という合唱曲、ちょっと聞いてください。

【映像：「ありがとうの手紙」】

（会場：拍手）

今日私が一番伝えたかった、皆様に聞いて頂きたかったのがこの合唱曲でございます。子ども達は8年間、9年間こうやって皆様と、色んな方と巡り会って、指導を受けて、すくすくと自分の想いを言葉にして伝えるという、合唱曲を歌えるまでになりました。釜石全体の小学生と中学生がみんなで集まって絆会議をやって、子どもたちの想いで作った、自分達の言葉で作った合唱曲なのです。私の今日一番の目的はこの歌を皆さまに聞いて頂いて、そして、聖学院さんと始まったこの8年の物語、4年前の永松さんの時に、本当に素晴らしい出会いをして、そして、私たちを呼んでくれて、あの時、実は、おばあちゃんたちも来て、釜石の食材とか、そういう協力もした。そしてそのあとに先輩たちがやってきたことを学生さんたちは続けてくれて、私たち、皆さんと一緒に育ってきたと思います。そして、一緒に育った子ども達はこうやってありがとうと言える子どもたちになりました。そしたら私たち、もっと頑張って生きてみたいなって思うようになりました！

（会場：拍手）

「3.11の役目」

ありがとうございます。8年10年で区切りをつけるという復興計画がありますが、それが区切りなのではなくて、今、私はですね、この子たちがどんな故郷をつくるか見てみたい！と思うようになりました。女将

は 63 ですよ、実は。あと 40 年は生きたいと思っておりまして、この会場に集っている皆様、この若い人たちが、そして釜石の子ども達がどんな日本の故郷をつくって見せてくれるか、楽しみ！私たち、長生きしましょう！

それから、岩手県陸前高田市の、奇跡の一本松のところに素晴らしいメモリアルパークができました。陸前高田に色んな方が集まりながら、そしてその足で釜石に足を運んでもらって、一緒に祈るということが、始まればいいなあと。祈るのは、東日本だけを祈るのではなくて、日本全国、どこでも起こっている、火山でも台風でも、地震でも。すべての自然災害を一年振り返って、祈るのが、3.11 になるのではないかなと。私たちずっと、東日本を祈る日と思ってきましたが、これからは、3.11 の役目は日本全体、もしかして世界中起こる自然災害のことを 3.11 にみんなで考える、祈る日になるのではないかなと思えてきました。

今日来させていただいて、ダイバーシティって、カタカナよくわかんないですけど、多様性ってことだそうで、私たちもすべて壊れて、何にもなくなって、家族もなくなったという想いの人たちも周りにいて、そこからでも、生きなきゃいけねーなぁって命もらったなぁって、生きさせてもらってきたこの生き方がもしかして色んな皆さんの役に立つようなことになっていってくれれば、私たち、頑張って生きる意味が、ここまできた意味があると思うので。こんなわけのわからない、一般市民の女将さんの話にこうやって皆様が集って頂いて、聞いて頂いたことにとても感謝ですし、一生懸命ですね、頑張って生き続けたいと思っております。

40 年先に福島が多分、廃炉を復興する、終わるんだ！と、福島の高校生がテレビで言っていました。「40 年かければ自分たちはちゃんと廃炉にしますよ。自分たちはできます！」って言ったのです。私が 40 年生きたい理由はそこにもあってですね、40 年すれば東日本は福島と一緒に、世界一頑張ったっていうことが言えるかもしれないので、是非、ずーっと、皆さんと一緒に見られるように頑張っていきたいなあと思っております。というお話をさせて頂いて、私の報告を終わらせていただきます。本日はありがとうございました。

（会場：拍手）

シンポジウム

「はじめに」

平　：本日は 2 部構成になっておりまして、1 部は女将さんの講演、このあと、女将さん、それから在学生を含めてシンポジウムをさせて頂きたいと思います。

今、女将さんからも大学とのつながりを話していただきましたが、実は、今年の 3 月に聖学院大学が釜石で色々な関わりをさせていただいたことをまとめた「釜石での出会いから始まった」という冊子を作りました。

それでは、第 2 部シンポジウムをさせていただきたいと思います。シンポジストを紹介させていただきます。

まず、宝来館女将の岩崎昭子さんです。

女将：よろしくお願いします。

平　：続きまして、政治経済学科 2 年、釜

石フェスティバル代表、富永湧介さん。
富永：よろしくお願いします。

平　：続きまして、児童学科 4 年、聖学院大学復興支援ボランティアチーム【SAVE】楢原郁奈さん。

楢原：（お辞儀）

平　：それから、コーディネーターを務めますのは、2017 年に聖学院大学を卒業しまして現在、聖学院大学ボランティア活動支援センターの職員をしております永松実梨さんです。

永松：（お辞儀）

平　：それでは、これ以降は永松さんよろしくお願いします。

永松：それでは、後半のトークセッションを始めさせていただきます。ご紹介いただきました通り、ここからは、聖学院大学ボランティア活動支援センターの永松がコーディネーターを務めさせて頂きます。どうぞよろしくお願い致します。

私自身、3 年前にはここにいる学生達と同じように、復興支援ボランティアツアーや、個人の活動で、2013 年から 4 年間で計 14 回くらい釜石に通っておりました。

そんな中、釜石に行く度に、釜石の人々に温かく受け入れて頂いて、釜石という町を知っていき、ここでの暮らしや、東日本大震災のあの日のことを教えて頂きました。たくさんの方のお話をこれまでも聞かせて頂いたのですが、あの時聞いた言葉は社会に出た今でも、とても心に残っています。そんな言葉を私たちに送ってくださったのが、女将さんですけれども、女将さんや釜石の方々から、もっといろんなことを受け取りたいという想い、そして、私にとって特別になった釜石の町や人々の魅力を多くの方に発信したい、という想いをもって、当時 3 年生だった私が、この釜石フェスティバルを開催しました。4 年生の時には、釜石について研究させて頂いて、卒業論文に書いたりもしておりました。

そんな私が、今回、ご縁がありまして、このような立場で女将さんをお招きすることができました。今、まさに、女将さんや釜石の方々と関わりを通して生き続けるということと向き合っている後輩たちにバトンを託して、短い間ではありますが、「釜石を通してみる～私たちの未来～」をテーマに、話を進めてまいりたいと思います。

富永君から、自己紹介と、釜石を訪れたきっかけ、これまでどんな活動をしてきたかをお話頂けますか？

富永：富永湧介です。釜石には、1 年生の夏の時から行き始めて、計 4 回行っております。釜石では主に、スタディツアー、あの、「よいさっ！プロジェクト」というツアーがあるのですが、それで釜石に初めて行ったっていうのがあって。なんの活動をやっていたかっていうと、「釜石よいさ」っていうのがあって、同じような動きでずっと踊っていたのですが、これがほんとに…ずーっとやっていると、身体にきて、元気がなくなってしまって。

会場：（笑）

富永：周りにいるお客さんたちの声援によって、だんだん元気になってきて、よっしゃ！盛り上げていくか！って、僕もその元気をもらって、全力で踊りました。

あとですね、冬にやった「サンタプロジェクト」というツアーで釜石に行った時には、釜石・大槌郷土料理研究会のお母さんたちと一緒に、郷土料理をつくったのですが、その料理がほんとに美味しくて！僕が家でも料理をつくるので、お母さんたちと一緒につくるのがほんとに楽しくて。僕って家ではその、簡単な味噌汁とか、カレーとか？そういうものしか作らないので、郷土料理づくりを体験したことがなかったのですが、つくったことない料理をお母さんたちと一緒につくることが本当に楽しくて、それに、料理する途中でミスってしまったりしたのですが、そこも励ましてくれて、「大丈夫だよ！」と言ってくれて。それで、一緒に元気よくつくりました。

でも、郷土料理づくりではじめにつくったのが、料理ではなく、もちつきだったので、「え、料理つくるんじゃないの？」って、「なんで餅をつくんだろう？」って疑問に思いながらつくったのですが、最終的に、おいしいものをつくって一緒に食べたってことを経験しました。料理をつくったり、色々と身体を動かしたり、釜石では色々と体験しました。

永松：ありがとうございます。では、次、楢原さん。これまでにどんな活動をしてきたか、お願いします。

楢原：私は今まで4年間で13回くらい釜石を訪れていて、私もSAVEという復興支援ボランティアチームに所属していて、富永君と同じように、スタディツアーに参加して、釜石にたくさん行って、多くの事を学んできました。

私が一番濃い関わりをしたのが、大学3年生の時に経験した、釜石の高校生と一緒に企画をつくるという活動なのですが、その活動は、釜石の高校生が、自分の地元・釜石をよりいいものにしたい！という想いをカタチにしたい、という大学生が集まって一緒に企画をして、そこから色んな活動を

実行するという形の活動をしてきました。

永松：ありがとうございます。2人とも、これまでそれぞれ活動を2年間と4年間してきたと思うのですが、どんなことがエピソードとして印象に残っているとか、あとは、釜石に訪れてみて、初めて知ったこととか、感じたこと、心に残っていることを具体的に教えて頂いてもいいですか？

「考えるきっかけになった住職の言葉」

富永：大学1年生の頃に釜石に行って、仙寿院というお寺の住職さんのお話を聞いたことがあるのですが、この話が本当に印象に残っています。東日本大震災の頃の状況を鮮明にお話しいただきました。僕が東日本大震災を経験したのが、小学5年生の時だったのですが、あの時僕は埼玉県の上尾にいました。ここで体験して、当時はあまり地震による影響はなくて、なんか大きな地震があったなっていう記憶で終わっていて、それ以降、東日本大震災を知るのはテレビを通して観たことしかないので、具体的にどういった被害があったのかよくわからなかったんです。それで、仙寿院の住職さんのお話を聞いて、当時のことを詳しく伺って、どうやって避難したのかとか、どれくらい避難場所にいたのかとか、当時何が足りなかったのかなど、実際に体験したことがないとわからないことを話してくれて、当時本当に大変だったということを痛感しました。

特に記憶に残っているのが、その、避難する際に、「自分の命は必ず守れ」という言葉でした。もし、目の前に助けられる人がいて、ピンチだったとしても、助けに行くことはせずに、自分の命を必ず守るということを言われて、これが印象に残っていて。もしその人を助けに行って自分も巻き込まれて亡くなってしまったら、その助けようとした相手ももし亡くなってしまったときに、その、亡くなった人のことを証明する人、その人がいたよってことを伝えられる人がいなくなってしまうので、自分の命は本当に守るようにして、で、生き残った人が、その、生き残った人なりの、その、使命というか、やることがあるということを知ったので、本当に印象に残っています。僕であれば、家族とかピンチだったとしたら助けにいっちゃうので、そういった考えてもいなかったことを話してくださったので記憶に残っています。

あと釜石で印象に残っていることなのですけど、本当に海が綺麗で。あの、高台から登って見た景色が本当にきれいで。ほんとに津波が来たのか？と、当時の状況が考えられないくらい、きれいになっていたので…。そうですね、行っただけだと、当時のことがあったのかな？と、ちょっと考えられませんでした。

永松：釜石に行く前は、まだ自分の実体験ではどういうことが起きていたかとか、あと

はもう、その時の気持ちを想像するっていうところまでは出来てなかったかもしれないけど、実際に足を踏み入れてみて、富永君が目で見て、お話を聞いて、自分自身もそういういざというときにどういう心構えをすればいいのかとか、あとはやっぱり、景色を見て、ああ、本当にここが釜石っていうところなんだ！って。行ってみると感動するよね！鮮明に映像のようにイメージが残っているのかなと思います。

では、楢原さんの方にも同じように聞かせてもらっていいですか？

「あたたかい人が多いのが釜石」

楢原：私は、先ほど女将さんの講演会の最初に見た津波の映像ですね、その津波の映像を、宝来館の裏にある避難道のいのちの道を、同じ場所から、映像を撮影した場所と同じ場所に立って、大学１年生の時初めて釜石に訪れた時に見ました。その時にやっぱり釜石に行っても、どこか他人事というか、本当にここで震災があったのかという風に思っていましたが、その映像を同じ場所に立って見た時に、初めて、本当にここでこんなにも大きな津波がきたんだっていう実感というか、すごく怖い思い、というか。なんか、自然と涙が流れてきた感覚をすごく覚えていて。

そして、私が印象に残っているのは、やっぱり釜石の皆さんの笑顔だなあと思っていて。さっきも何回かお話があったように、「釜石よいさ」では、本当に多くの釜石の人の笑顔を見ることができて、沿道から「がんばれー！」って、「来てくれてありがとー！」って言ってくれる、笑顔が本当に印象に残っていて。あたたかい人が多いのが釜石だなあっていう風に、強く思いました。

永松：「釜石よいさ」は４回目？

楢原：はい。

永松：４回連続で参加していて、やっぱりこう普段はお話を聞く人たちではない人たちと触れ合う機会はないけれど、「釜石よいさ」では、会場にいる方々と実際顔を合わせて関係を築くことができたり、確かめ合えるような機会になっているのかなっていう風に思います。

実際にツアーに学生達も行っていて、卒業後も、私も含めてなんですけれど、たくさんの卒業生が釜石にお邪魔していて、そのたびにいつも女将さんやたくさんの釜石の方々にもあたたかく迎え入れて頂いていますが、楢原さんや富永君も、きっと何度か釜石へ訪れて、色んな方にお話しを聞いて、色んな場所に実際に立ってみて、その当時の話、今の話を聞かせてもらったと思いますが、そんな釜石での経験から、今自分達が何を受け取っているかとか、釜石からどんなことを学んでいるっていうのは二人にとってどんなことなのかな。

「自分を変えようとするきっかけをくれた」

富永：学園祭で、共同代表ってことで釜石フェスティバルを開いていて、それの準備で9 月に釜石に行ったのが最後で。何度も行った中で、僕が釜石の人から受け取ったものは元気ですかね。

その…高校の頃、人と関わるのがあまり得意ではなくて。極力、人と関わりたくない、誰ともしゃべりたくない、という気持ちがあって。大学生になってから、そんな自分を変えたいということで、色んな活動に、例えば、アルバイトをしてみたり、サークルに入ってみたりとか、色々頑張った時期があったのですが。それで、学内でボランティア活動を紹介するイベントがあったので、たまたま出て、そのボランティア活動を紹介している中で最初に目に入ったものが復興支援のボランティアでした。この復興支援ボランティアをきっかけにツアーに参加をして。最初はその復興支援ボランティアに興味がなかったわけではないですが、前向きな気持ちとかってなくて、よしやってみるか。みたいな感じで、最初は参加しました。

いざ釜石に行くことになって、行く前に映像を見て、現地釜石について学ぼうという機会があったのですが、その時に、釜石はたくさんの人が津波で亡くなってしまったところでもあるので、そういった人たちって悲しい体験というか、なんていうか、その、辛い体験をしているので、僕もあの、高校の頃の、自分がつらかったとき、あまり人と関わることをしなかった時期があって、その時の自分と同じように考えていて、当時はあの…なんていうんですかね。津波にのまれた人たちの辛い体験とかって、自分の高校の頃の気持ちというか、なんか、それに重ねてしまうところがあったので、今、そういう辛い体験があった人たちって今どういうことをやっているのかなって。明るいのかなあとか、前向きな気持ちなのかなぁっというのを知りたくて行って。気になってほんとに。僕自身も実際に行って会って話してみたいと思って行ったのですが。

いざ行って釜石の人に関わると、本当に元気で。あれ、この人たち辛い体験したんじゃないのかな？って。なんでこんなに元気なのかな？という感じで関わり続けていて。人と関わるのが苦手だった自分が、なんと言うのか…どうも、励まされているというか。お祭りも踊って励まされたり、あとは料理を一緒に作って一緒に楽しいことをしたりなど、元気をくれて…なんていえばいいんですかね、変えようとしている自分に対してきっかけを与えてくれたのが、僕にとっては釜石だったので。本当に、元気づけというか、変えようと思っている自分に対して元気をつけてくれるので、ほんとに、あたたかい町だなと。釜石じゃないとだめで。ほんとに行ってよかったなあという想いです。

永松：自分自身がどう関わっていけばいいかとか、あと、本当に関係性を築いていって、大丈夫なのか？とすごく不安な気持ち？もずっと抱えていたのかなっていうのはこれまでもお話聞いていて感じていて、そこから、自分で一歩、SAVE に入って活動してみようっていうところから、釜石の皆さんにもお会いして、たくさんあたたかく受け入れて頂いて、それによって自分の気持ちもどんどん変わっていったのかな？

富永：そうですね、大学生活でたくさんの活動に関わって、色んな人と共同作業というか、関わりを持とうというきっかけに大きくなったので。釜石との関わりが。悩んでいる自分に対して元気づけてくれて、それが本当にうれしくて、今でもこうして学園祭で釜石フェスティバルを開く原動力といいますか、モチベーションに繋がっていて、釜石の人たちと一緒に楽しんでいきたいという気持ちがあって、頑張っています。
（会場：拍手）

永松：富永君はまだ 2 年生なので、これから活動が続いていくかなって思いますが。楢原さんは 1 年生の時から活動していて、入学する前から震災に対して想いがあったって聞いていますが、そこから自分自身が現地に行ってみて、色んな方に、女将さんにお会いしたりして、自分はどんなことを受け取ってどういう風に変わっていったかなっていうのを話してもらえますか？

「自分の命を守るということ」

楢原：はい、私が釜石を何度も訪れて受け取ったことは、やっぱり、自分で自分の命を守るということで、女将さんとか、震災を経験された方が私たち埼玉の人とかに話してくださるのって、一つの想いとして、今、日本全国でたくさんの災害が起きている中で、一人でも多くの人に助かってほしいっていう気持ちがあってお話してくださっているのではないかって私は思っていて。

この間も台風 19 号があって、関東の方でもたくさんの被害を受けたところがあって、私の家も、被害はなかったのですが、川の近くですごく怖い思いをして、避難所にも逃げたんですけど、その時、逃げようと思ったのは、やっぱり釜石で自分の命は自分で守るっていうお話を何度も聞いていたので、ここは大丈夫だろうって、今までこなかったんだから大丈夫だろうっていう風に思わないで、もしものことがあったらっていう風に考えて、川の氾濫も同じ水害なので、台風の時はすぐに釜石で見た津波の映像が頭をよぎって、ここにいちゃだめだって。何もなかったとしても、逃げてよかったねって思えるようにしたいと思って、家族と一緒に話して、早いうちに避難所に行くことを決めたのですが、そういう風に思わせてくれたのが、やっぱり釜石でお話を聞いた、そういう体験ができたからだなと私は思っています。

永松：一年生の時からずっと色んな方にお話を聞いて、楢原さんも、活動を続けるかどうかとか、きっと悩んだ気持ちもあって、乗り越えてここで活動できているのだなっていうことはお話の流れで聞きましたけど、女将さん、学生 2 人の歩みを聞いて頂きましたが、2011 年から活動をしてきて、学生達もずっと女将さんにお世話になっておりますが、何か印象に残っていることとかあったら教えて頂けますか？

「私たちにとって必要な人たち」

女将：あのね、私、釜石に学生さんたち来て、私たちのことを「あったかくって」って言ってくれるけれど、釜石はね、皆さんが来ることで私たち元気もらっているのね。皆さんにはね、私たちの仲間っていうか、必要とされてきているって思っているから。私たちにとっては、一人ひとりが、必要なの。必要

で、そこに立った時から、私たちの仲間っていうふうに、そこにいてくれなきゃ困る人間なわけよ、皆さんは。

それが、被災地の私たちの 2011 年からで、皆さんは助けに来てくれているかもしれないけど、私たちにとっては出会う一人ひとりが私たちにとって必要で大事な人なんですよ。私たちにとってはお客さんではないし、助けに来てくれた人でもなくって、私たちにとって必要な人たちがこの釜石に来て下さる人たちなんですよ。

特に聖学院の皆さんは 2011 年から続けていて。その考え方は、必要とされているから自分はここへ来ていたと思って頂いて。もっともっと、自分ができること、言われるのではなくて、感じて戻った人たちが、多分この通り永松さんのような人になったり、先輩のようになったり、そういう人間になってくれる。で、あなた方は必要とされていたから今ここに立っていて、（楢原さんを指して）あなたは四年もやってくれて、（富永さんを指して）あなたも二年目で、自分の中で悩み続けただろうけど、そうではなくて、やれることがいっぱいあるから、釜石に呼ばれた人間なのよ。そこに貴方たちの立ち位置と役目はあるから、是非通い続けて。

「自分で自分の命に責任を持つって、結局、人を助けること」

女将：釜石の防災教育が先月の台風の時、お役に立ってありがたいです。自分で自分の命を守るっていうことは、人を助けるための言葉なんですよ。自分で自分の命に責任をもつ、それが結局、人を助けることなんです。冷たい言葉ではなくて、逃げることが一番の目的ではなくて、自分の命を守る行動をすることが結局は人を助けているのです。そういうことができる人間は、もっとも前向きな行動をしている人間なのです。

釜石の「いのちてんでんこ」が、「自分で自分の命を守れ」っていうのは、それは自分だけの問題だと言っているわけではなくて、あなただけ助かってくださいでもなくて、仙寿院の住職さんが言ったその言葉の意味は、生きる死ぬは、人は、神様が生きてほしいと思ってもそれができないことって絶対おきて。でも、生きてれば、あの人が生きていたんだよ、ここにあの日存在していたんだよって、生きた私たちが語らなければ、存在してなかったと同じになってしまうのです。生きた人間が語ってくれなければ、その人は、生きていたことにならないんです。住職さんが言いたかったのはそれなのだと思います。

ここに、みんな生きていたの。人生があったんだと。この町つくり続けてきたんだ。でも、生き残った私たちが一人ひとりを思い出して語ってやんないと、存在してなかったことになってしまうから、生きた人たちには、その自分たちが生きていたことを忘れないでくれって、語ってくれって、おらたちはそこに生きていたんだぞって言う事を、言ってあげなくちゃいけない。

祈るっていうことは、その人を忘れないことで、忘れないことが、結局は祈り続けることなのだと思って、あの、女将さんはこう思って話続けたいのだけど、今は、忘れないってことが最大の浄化な気がしますね。忘れないって思うことが、大きい災害を小さい災害にすることなのかな。是非ですね、あと二年あるから！あなたは、呼ばれてきたのだと思うよ、釜石に。釜石にこうやって聖

学院の学生さんたちがこの８年来続けたのは、そこに必要であるから、来たのであって、目的はいっぱいあるから、やることはいっぱいあるから、頑張ってそれをつかんでいって。

富永：はい！

永松：女将さんありがとうございます。私は震災から２年程たった時に初めて釜石に訪れて、釜石の様子を見たときに何もできないんじゃないかって…すごい、そういう気持ちになってしまって（涙）。私たちが関わっていいのかどうかすごく悩んでいて。その気持ちを女将さんに、行く度に受け止めてもらって、そういう風に女将さんや釜石の方が受け入れてくださったから私たちも…なんというか、自分達が釜石の人たちと関わりを築いていっていいんだっていう、こう、気持ちを受け止めながら歩んでいくことができたなと思っていて…。

「一生懸命やってくれるって、それを見ただけで、うれしい」

女将：あなたは本当に素晴らしい人になりましたよ！本当に！ねえ、そう思いますよね？会場の皆さん！中々そういう女性になるって、なりたくてもなれないですよ。本当にあなたは素晴らしい人になったと思う。

「釜石よいさ」にね、こうやって踊りに皆さんが参加することが、実感していると思うけど、見ている人たち喜ぶでしょ。だってね、自分が踊りたくてもね、私も年取ってくるとね、跳ねられないのよ。みんなが参加して跳ねてくれて、元気に、こんなちっちゃなただ一つの踊りを踊り続けるだけの踊りなのに、外からみんながきてくれて。そうすると、みんながそれを見て元気をもらえるのよ。私たちの釜石に来て、祭りを盛り上げてくれるっていう、その瞬間を見ただけで、私たち幸せになれる。「よいさ」って祭りは、若い人たちで一つになりながら元気に続けたいって始めたお祭りだから。

震災後、人口が減って、若い人たちも減ったけれど、外からも皆さんが来て踊ってくれることで、こんな風に一生懸命やってくれるって、それを見ただけで、実は市民はうれしいのよね。元気になるのよね。みんなも元気になる楽しい祭りだって言うけど、本当に、参加してくださる皆さんがあることが、私たち市民にとってはね、嬉しくて楽しいのね。

私も今年、８年ぶりに「よいさ」に参加したんですよ。「よいさ」のお祭りに、仲間がいっぱい昔は出ていて、その仲間がいなくなって、その祭りに自分が出るってことが、私はなかなか踏ん切りがつかなかったの。祭りはみんなでつくっていて本当に楽しい祭りだったから。だけど今年は、一緒にみんなと踊ろうと思います！踊ることが、空にいるみんなにも、届く想いだと思っているものだから。皆さんが諦めずに、通い続けたことで、私たちもようやく、参加しようっていう気持ちになれました。とっても感謝し

ています。

永松：ここへ来るまでに、活動する前の、関わることは難しいという気持ちとか、あとは、震災に対してどう向き合ったらいいのだろうっていう気持ちを抱えて、これまで「釜石よいさ」に参加させてもらったり。少しずつ、関係性を築いて、こうなっていったのかなって思うのですが、2人が…（涙）…きっと2人が変わるまでと同じような気持ちで、まだこの会場にも釜石に行ったことがなくて、でも何かしたいって想いを抱えている人とか、でもどうゆう風に動いたらいいかわからないっていう風に思ってる人たちがきっとこの会場の中にもいらっしゃるかなと思うので、2人からこれまでの活動を踏まえて、こういう風に変われたんだっていう、届けたいメッセージをお話していただきたいと思います。富永君いいですか？

「踏み出してみると違う世界が見える」

富永：釜石と関わる前は、人との関わりが難しくてどうやって接すればいいとかわからなくって。それで人との関わり方が分からないまま釜石に行って、そこで、今まで関わってきた釜石の人たちとの関わりを踏まえてどんどん関わり方っていうのを自分なりに、あ、こうやって関わっていけばいいのだなっていうことを見つけて…そうですね。釜石と出会って元気もらって、関わり続ける方法がわかったというか、今だと、当時の自分に対しては「大丈夫だ！」と言い聞かせるような気持ちで。

なので、人と関わること以外にも、勉強とか、うまくいかないとか些細な悩みとかを色々抱えていたりもすると思うのですが、人との関わりで見つけ出すものというか、発見して自分の悩みというかそういったものの解消になると思うので、一歩踏む出すことができなかった当時の自分みたいな関わることが難しいとか悩み事がある人とかに対して、本当に一歩踏み出すだけで、いつもとは違うことをやるだけで見えてくる世界が違うってことを僕は体験したので、一歩踏み出せない人に、踏み出す勇気は必要かもしれないですけど、踏み出してみれば見える世界が違うんで、是非、ちょっと僕から言うとまだ力が足りない…すいません。

永松：そんなことないよ。

富永：ありがとうございます。なので、僕の言葉が支え…ヒントになって一歩踏み出せるようになったらなあという願いがあります。

永松：富永君も2年間歩んできて、変わり始めた自分に、今、気づいた位だと思うので、これからどんな風に変わっていくかって楽しみだと思います。楢原さんからも是非。

「釜石に是非行ってみてほしい」

楢原：私も、震災の 2011 年の頃は中学 1 年生だったので、ボランティアをすることができなくて、募金をすることくらいしかできなかったのですが、大学に入って、釜石に関わることができて、まずは、釜石に行ってみて、釜石であった出来事を知るっていうことがすごく大切なことだと思うので、まずは行ってみて、その状況を知って、その上でやっぱり、釜石はそういう悲しい出来事があったっていう場所だけじゃなくて、もちろんそのこともしっかり伴って色んなことを心に刻んだ上で、釜石は本当にそれだけじゃなくて、素敵な笑顔の女将さんがいたり、すごくあたたかい町だし、すごく海がきれいで、砂浜もすごくきれいで、本当に美味しい海産物とかがたくさんあるので、釜石に行ったことがない人は是非、行ってみてほしいなって本当に強く思います。

（会場：拍手）

永松：　富永君も楢原さんも、それぞれ釜石と出会うまでにきっと色んな困難とか、こう、変わりたいって気持ちとかがあったと思いますけど、誰かに寄り添いたいとか、力になりたいっていう気持ちから女将さん達に出会って、その気持ちを受け止めて頂いて、活動してきて、色んなことを教えて頂いたからこそ、ここに二人が立つまでになれたのかなって思います。学生たちのこれまでのお話を受けて、女将さん学生へのメッセージ、また会場の皆さんへのメッセージを頂けますか？

「“優しく一緒に、悩みながら”が扉を開ける」

女将：聖学院の学生さんたちは、とても優しくて、その優しさとすごく繊細な気持ちが、実は被災地は特に、やっぱり学生さんたちと同じように表に出られなくなったり、一人暮らしのおばあちゃんだったり、色んなことを抱えている子ども達とか、大人もいっぱいいます。それを強く、あ、私ちょっと強すぎるって言われるので、ではなくて、なんかすごく、優しく一緒に、悩みながらっていう風に学生さんたちがやることが、本当に被災地の私たちにとってはね、「あ、私でも大丈夫かもしれない」ってこう、扉を開けるっていうかね、そんな気持ちになれるんだと思うんですよ。

絶対、皆さんのやさしさは通じます。そうやってずっと交流してきて、こうやって一緒に育ててもらったなあって、つくづく思ってですね。優しいことは、一番の強さだったから。そして、人の痛みがわかる人が、一番、人の役に立つ。弱さと痛さをわかっている人間でなければ、人は助けられない。そう思います。

永松：ありがとうございます。限られた時間の中ではありましたが、女将さん、富永君、楢原さんの言葉を通して、釜石から何を受け取ってこれからどう生きていくのかというテーマでお話して頂きました。すみません、私も途中で泣いてしまったのですが、私自身も 2013 年からツアーで釜石を訪れて、震災から 2 年というタイミングで、女将さんや色んな方に、命をかけて、その時のお話をしていただいて。あの時のことは今でも本当にはっきりと覚えているのですが、皆

さんが色んなものを抱えながらも、私たちのような存在に感謝してくださる…そんな姿を受けて、こう、みなさんの笑顔のために何かしたいっていう、そういう、本気で考えたいっていう気持ちに、私たち、そして後輩たちも受け継いでいったのかなという風に…。

女将：育ててくれたよね。続けますよ。つながっていてください。

永松：　本当に、女将さんや釜石のいつもお世話になっている方々には感謝してもしきれないくらいで…。女将さんから、何があっても生き続けるんだよっていうメッセージを受け取って、このメッセージとどう向き合っていくか、どう、自分自身が生きていくかっていうのを問い続けてきたような気がするので、これからも、そのメッセージを受け取りながら、それと向き合いながら、問い続けていくのではないかと思っています。
少しでも、私たちが女将さんや釜石の方々から受け取ったことを感じて頂き、お一人お一人がどう自分の人生に向き合っていくのかということを、釜石と自分たちの未来を共に考えるきっかけになることができていたらとてもうれしいです。
以上を持ちまして、「生き続けるということ～釜石のあの日、今、そして未来～」の講演会トークセッションを終了させていただきます。富永君、楢原さん、そして宝来館女将の岩﨑昭子さんに、大きな拍手をお願い致します。
（会場：拍手）

新入生のボランティア意識調査
―「2019 年度ボランティア活動に関わるアンケート」から―

1. 調査の目的と概要

聖学院大学ボランティア活動支援センターでは、新入生のボランティアへの意識や活動の意向を明らかにすることを目的として、2019 年４月８日(月)に行われた学生支援ネットワーク説明会において本アンケートを実施した。

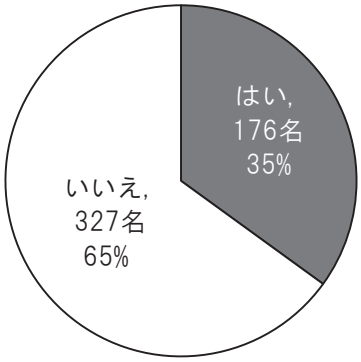
2019 年度入学者 689 名のうち 503 名から回答を得られた。今後さらに魅力的な活動マッチングや新規プロジェクト立ち上げへの支援などに活かしていくため、このアンケート結果を活用する。

2. 調査結果 ※小数点以下は四捨五入で算出

(1)大学入学以前のボランティア活動経験について

大学入学以前に自発的にボランティア活動に参加した経験があるか尋ねたところ（図１）、経験有りとの回答が 35%（176 名）で、経験なしの回答は 65%で（327 名）だった。

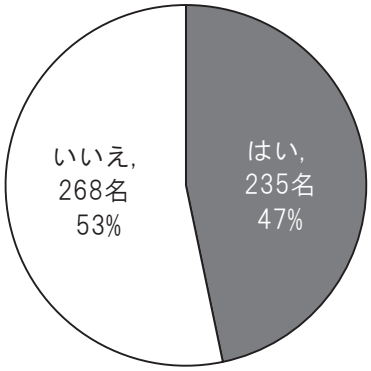
図 1. 大学入学以前の自発的なボランティア活動経験



(2)大学時代にボランティア活動に参加したいか

本年度、活動希望者は全体の 47%（235 名）となり、活動参加を希望しない者の 53%をやや下まわる結果となった（図２）。

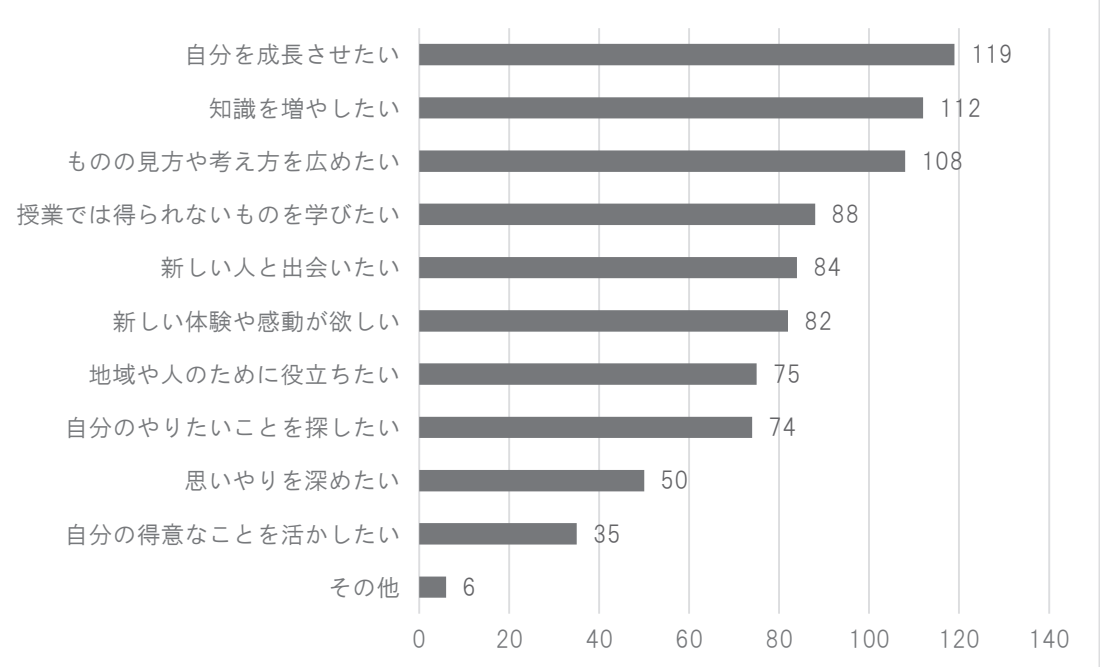
図 2. 大学時代にボランティア活動に参加してみたいと思うか



(3)ボランティア活動に参加したい理由

参加希望者（235 名）のみを対象に、ボランティア活動に参加したい理由について複数回答で尋ねた（図３）。

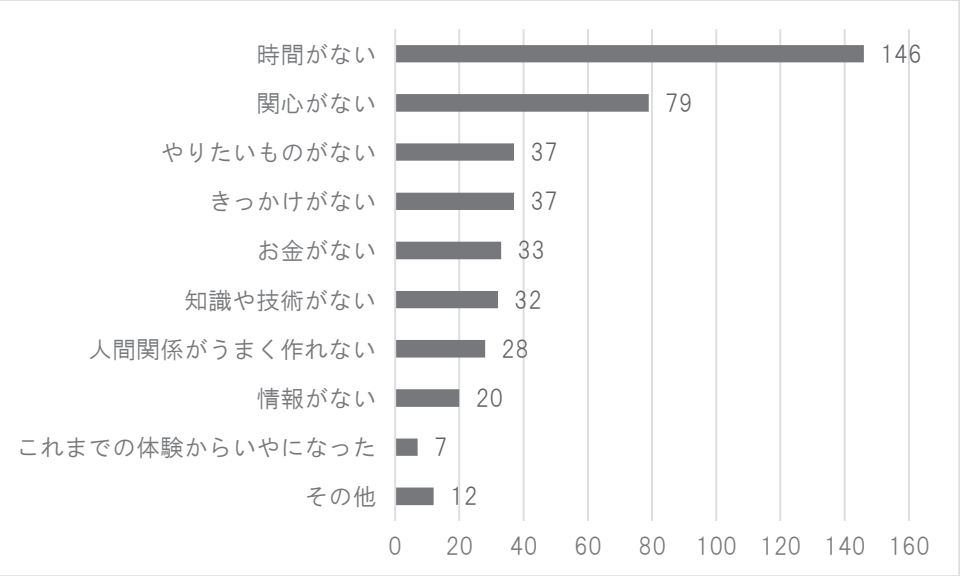
図 3. ボランティア活動に参加したい理由(回答者 235 名／複数回答可)



(4)ボランティア活動に参加を希望しない理由

ボランティア活動に参加を希望しない学生（268 名）を対象に、参加を希望しない理由を尋ねた（図４）。

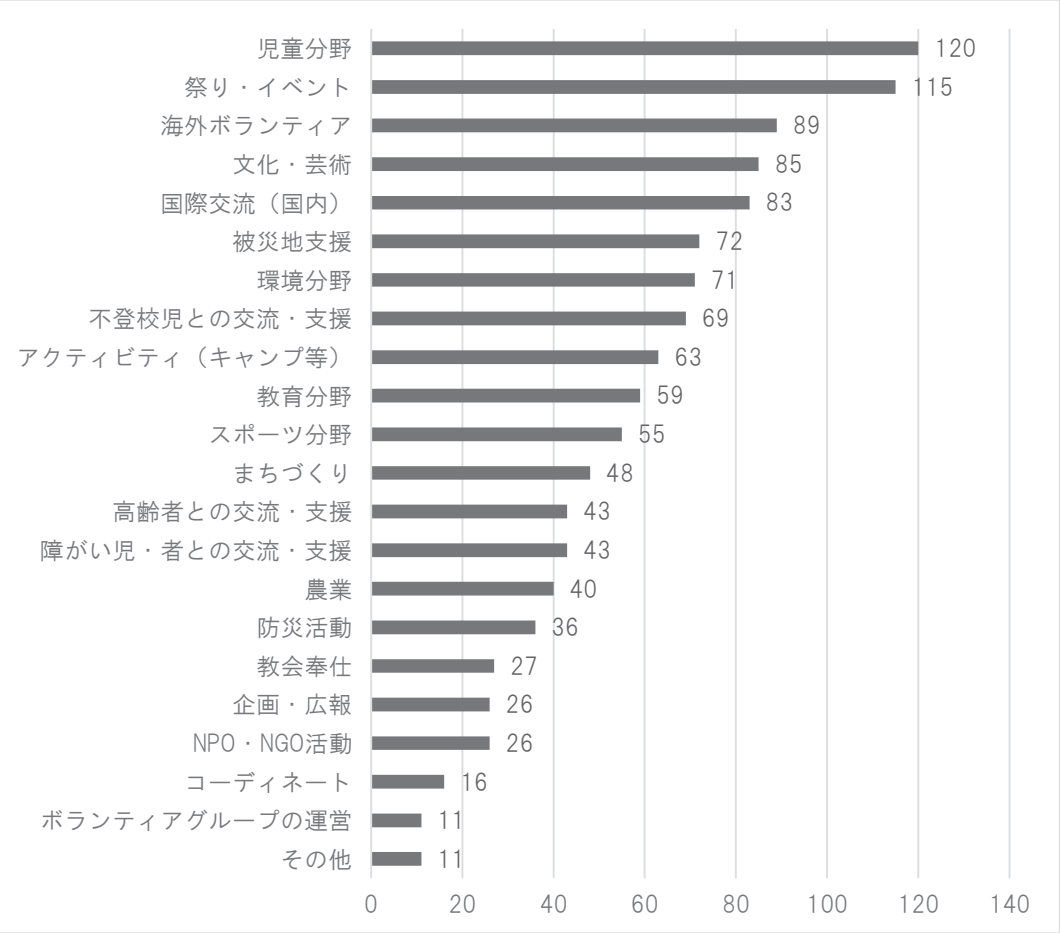
図 4. ボランティア活動に参加を希望しない理由(回答者 268 名／複数回答可)



(5)関心があるボランティア活動について

関心があるボランティア活動の分野を複数回答で尋ねたところ（図５)、最も多かったのは「児童分野 120 名」で、次に多かったのが「祭り・イベント 115 名」であった。

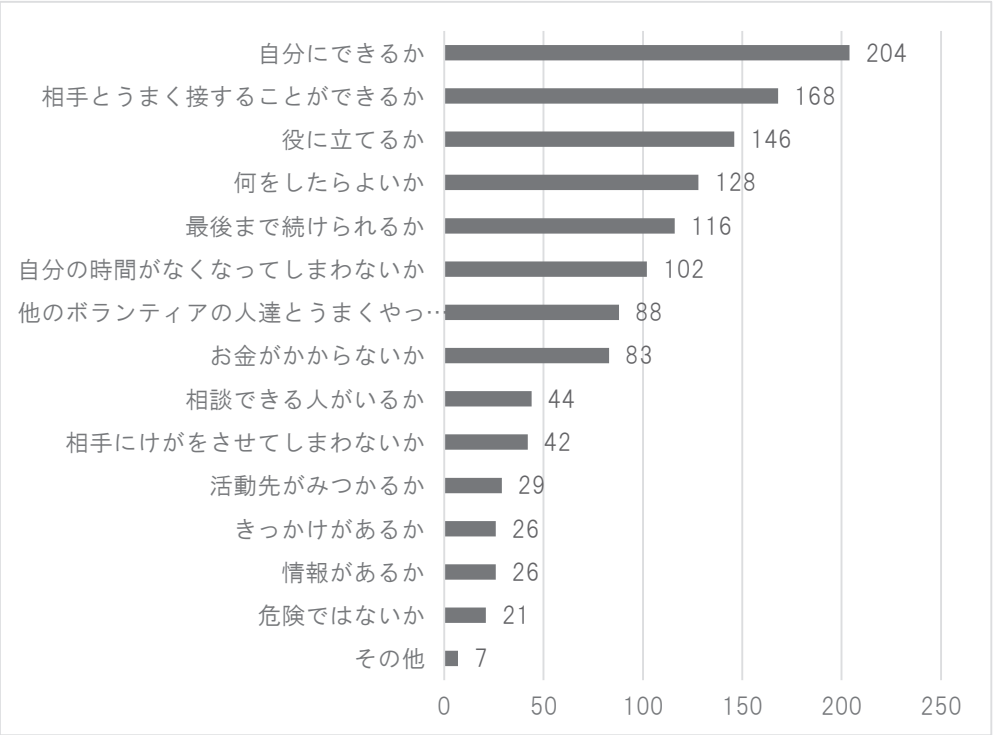
図 5. どのようなボランティアに関心があるか(回答者 503 名／複数回答可)



(6)ボランティア活動を始めるにあたっての心配や不安

こちらの問いも、複数回答にて尋ねたところ（図６）、「自分にできるか　204 人」「相手とうまく接することができるか　168 人」「役に立てるか　146 人」の３項目が上位を占めた。

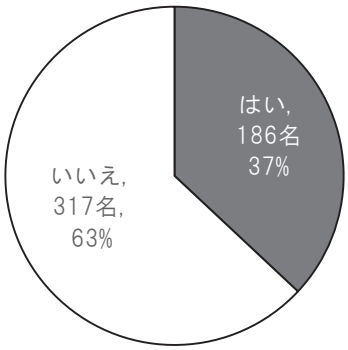
図 6. ボランティア活動を始めるにあたっての心配や不安(回答者 503 名／複数回答可)



(7)ボランティアセンターの認知度

ボランティア活動支援センターの存在を入学時に認知していた新入生の割合は回答者中37%であった（図７）。

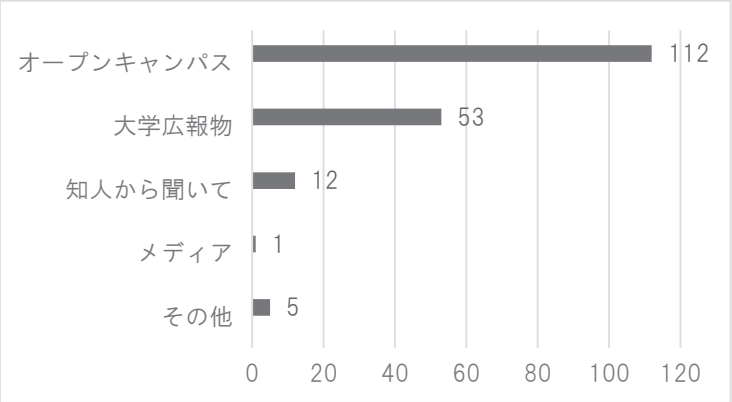
図 7. 入学前に、ボランティア活動支援センターを知っていたか



(8)入学前にどのようにボランティア活動支援センターがあることを知ったか

図７で「はい」と答えた方を対象に、入学前にどのようにボランティア活動支援センターがあることを知ったかを尋ねたところ、多かったのは「オープンキャンパス　112 名」続いて「大学広報物　53 名」であった。

図 9. 入学前にどのようにボランティア活動支援センターがあることを知ったか
（回答者 186 名／複数回答可）



センター年間行事一覧（主催・共催・協力事業等）

月	日	概要
2019年４月	３日	**第77回センター運営委員会**
	12日、15日	「新歓ボラ Tea」実施
	20日～21日	ボランティアスタディツアー「桜プロジェクト８」実施（岩手県釜石市）
５月	８日	**第78回センター運営委員会**
	13日、15日	「ボランティア・まちづくり助成」応募説明会
６月	３日～17日	学生サポートメンバー養成講座（計４回実施）
	５日	**第79回センター運営委員会**
	８日	「ほたる祭り」実施
	15日	「ボランティア・まちづくり活動助成」公開審査会実施
７月	３日	**第80回センター運営委員会**
	10日	「七タボラ Tea」実施
	15日、18日	ハンセン病勉強会
	31日	「星に語りて」上映会実施
８月	２日～５日	ボランティアスタディツアー「よいさっ!プロジェクト６」実施（岩手県釜石市、宮城県石巻市）
	６日～８日	釜石〇〇プロジェクト合宿（岩手県釜石市）
	16日	オープンキャンパス参加
	30日～ ９月１日	釜石「キッズかけっこ教室」（岩手県釜石市）
９月	24日	学生ボランティア対象 SDGs 研修会
	27日	ハンセン病資料館見学会（東京都清瀬市）
10月	２日	**第81回センター運営委員会**
	20日	さいたま北商工協同組合主催「さいたま KI-TA まつり2019」協力（さいたま市北区）
11月	２日、３日	ヴェリタス祭（学園祭）にて「ボラフェス！2018」実施
		ヴェリタス祭（学園祭）にて「釜石フェスティバル」実施
	６日	**第82回センター運営委員会**
	12日	「留学生のみなさんボランティアをしようよ」実施
	29日～ 12月１日	ボランティアスタディツアー「サンタプロジェクト９」実施（岩手県釜石市）

月	日	概要
12月	4日	**第 83 回センター運営委員会**
	7日	上尾市大谷支所・大谷地区自主防災会と連携したフィールドワークの実施
	14日	上尾市大谷支所・大谷地区自主防災会と連携した「防災啓発研修」実施
	16日	「ボラ年会」実施
2020年1月	8日	**第 84 回センター運営委員会**
	10日	「ボランティア・まちづくり活動助成」報告会
2月	5日	**第 85 回センター運営委員会**
	12日、26日	聖学院中学校中 1LLT 授業協力
	13日～15日	日本財団学生ボランティアセンター・立正大学社会福祉学部ボランティア活動推進センター共催「チームながぐつプロジェクト令和元年台風 19 号福島」実施
3月	4日	**第 86 回センター運営委員会**

各事業報告

1. ボランティアの人材育成とその担保に関する事業

(1)学内ボランティア団体の育成支援

センターでは個人のボランティア相談のほかに、団体の活動相談にも応じている。活動に関するアドバイスや役立つ情報の提供に限らず、必要に応じてファシリテーターとして団体の会議に出向くこともしている。

主な相談内容：

・組織運営に関すること
・メンバー間のコミュニケーションに関すること
・新入生のまきこみ方
・メンバーのモチベーションアップに関すること
・広報に関すること
・イベント出展内容に関して　　など

(2)学生サポートメンバー養成講座(8 期)の実施

学生と共につくる・育つセンターとして力を入れている、学生サポートメンバー（通称：サポメン）の養成も 8 期目を迎えた。サポメンは、ボランティアを実践している学生自身が、他の学生を巻き込み、ボランティアのきっかけをつくるとともに、学内外の学生ボランティアを盛り上げるための企画・運営を行う役割が期待されている。そのため、現役サポメンの協力も得て養成講座を実施し、サポメンとして必要となる考え方や基礎的な知識・技術を体験的に学び、終了後はサポメンとして活躍していけるよう支援している。同時に講座を通して、受講生同士・先輩サポメン・コーディネーター・他大学の学生との関係づくりも図っている。昨年度に引き続き、十文字学園女子大学ボランティアセンターの学生スタッフが参加し、大学間の情報交換の場ともなった。

ⅰ)企画概要

① 第１回「学生サポートメンバーの役割と可能性」

初回ということで、なぜサポメン養成講座を実施しているのかボランティア活動支援センタースタッフより説明し、さらに現在サポメンとして活動する先輩より活動の意義と魅力を紹介した。後半では、学生のボランティアの一歩を後押しする策を考え、発表。受講生たちは「サポメンになる」その大きな一歩を踏み出した。

日　時：2019 年６月３日（月）18:00－20:30
参加者：８期生８名、現サポメン３名
　　十文字学園女子大学学生１名・コーディネーター1 名　参加者計：13 名

内　容：・サポメン講座趣旨説明（サポメンとボラセンの歴史、役割、願い）
・現役サポメンから「サポメンの活動と魅力」について一言
・参加者全員の自己紹介（アイスブレイク）
・ワーク：テーマ「ボランティアの一歩踏み出せない原因と解決策を考えよう」

② 第２回「アイスブレイク 100 連発！？＆助成金審査会にむけて」

前半は、ボランティア活動の場で出会った人たちの緊張感をほぐし安心して活動に取り組むことができるよう、各所で取り入れられているアイスブレイクについて学んだ。「アイスブレイクとは？」というレクチャーのあと、ボランティア先などで使えるアイスブレイクを参加者全員が実際に進行した。

そして後半は、第３回に控えている「ボランティア・まちづくり活動助成金事業公開審査会」に向けて、事業の紹介を行った後、サポメンの関わりについて説明を行った。

日　時：2019 年６月 10 日（月）18:00～20:30
参加者：８期生：６名、現サポメン：３名
十文字学園女子大学学生２名　参加者計：１１名
内　容：・レクチャー「アイスブレイクとは？」
・アイスブレイクをやってみる
・ふりかえり
・助成金審査会の説明と役割決め

③ 第３回「学内外のボランティア活動を知る」

ボランティアをしたい学生を実際の活動につなげるには、学生が参加できるボランティア活動についての情報・理解が不可欠となる。そこで、「ボランティア・まちづくり活動助成金公開審査会」にスタッフとして参加し、公開審査プレゼンテーションを通じて聖学院大生のボランティア活動の取り組みを理解した。また、地域の来場者の皆さんとの交流を通じて、聖学院大学周辺の地域貢献活動への理解を深めた。

実施日：　2020 年６月 15 日（土）12：00～18：00
参加者：８期生：５名、現サポメン：５名、参加者計：10 名
内　容：同日に行われた「助成金審査会＆ドネーションパーティー」において、審査会場ではタイムキーパーや受付補助を体験し、ドネーションパーティーの時間では、インタビューを通して学内・外の来場者の所属している団体について情報を収集する体験をした。

④ 第４回「第三回の振り返り＆ボランティアコーディネーターロールプレイ」

「ボランティア活動助成金公開審査会」を振り返りながら、「ボランティア活動助成金」の仕組みをもっと学生に活用してもらうためのアイデア出しを行った。後半は、学生スタッフとして実際にどのようにボランティア活動を紹介していくのか、ロールプレイを行った。

実施日：2019 年６月 17 日（月）18:00～20:30
参加者：８期生：６名、現サポメン：２名

十文字学園女子大学学生２名・コーディネーター1 名　参加者計：11 名

内　容：・助成金審査会の運営ふりかえり

・ワーク：「友人にボランティアについての相談を受けたら」（コーディネーターロールプレイ）

ⅱ）成果と課題

・サポメンとしての具体的なミッションを共有できた。また、現サポメンも 4 回を通して受講生と丁寧な関わりを持つことができ、8 期生を迎えての新たな動きもスムーズに開始することができた。

・昨年度に引き続き、他大学の学生が毎回参加したことで、受講生や現サポメンは本学の取り組みを客観的に見て評価することができた。

・今回の受講生は所属がほぼ重ならず、最初は受講者間でのコミュニケーションにぎこちなさもあったが、異なる意見を聞くことで、多様な視点を持つきっかけをつくることができた。

（3）視野を広げるボランティア教養講座の実施

社会の課題と向き合うための教養講座を立ち上げ、学生たちとともに社会の諸問題と向き合い、学ぶ機会を持っている。

ⅰ）「人間回復への道～ハンセン病から学ぶ～ハンセン病勉強会と資料館見学会」

ハンセン病は感染力が弱く非常にうつりにくい病気である。しかし、治療薬がない時代には、変形をおこしやすいという特性から主に社会から嫌われ差別されてきた。強制的に療養所に入れられた患者は外出を禁止され、隔離された。第二次世界大戦後、完治する治療薬が登場した後も、実質的な隔離状態は続いた。

今日、この隔離状態は解かれ、回復者たちには社会復帰の道が開かれているものの、今なお世間の無理解や偏見は続いている。

「人に偏見を持ち差別をする」といった過ちを繰り返さないためにも、この歴史的事実を

「他人事ではなく、自分たちの問題」として捉え直し、考える時間を学生や教職員と持った。
　なおこの企画は、心理福祉学科と人間福祉学科との連携のもと実施した。
主催：心理福祉学科／人間福祉学科／ボランティア活動支援センター

①　関連映像の鑑賞
日程：2019 年7月 15 日(月) 18 :00～20:30
場所：聖学院大学 1cafe
参加者：聖学院大学学生：２名、教職員：２名　参加者計４名
内　容：・関連 DVD 鑑賞
　　・感想の共有
②　勉強会
日程：2019 年7月 16 日(火) 12:15～12:55
場所：聖学院大学 1201 教室
参加者：学生：10 名、教職員：４名　参加者計 14 名
内　容：ハンセン病に関する講義
講　師：心理福祉学科長　田村綾子教授、心理福祉学部チャプレン 五十嵐成見助教
③　見学会と意見交換
日程：2019 年9月２７日（金）12: 50～17 :00
場所：多磨全生園・国立ハンセン病資料館
参加者：学生：16 名、教職員：５名　参加者計 22 名
内　容：・資料館見学（資料映像の鑑賞含む）
　　・園内散策
　　・森元さんのお話
　　・感想の共有
案　内：元聖学院中学高等学校　西浦昭英教諭
ゲスト：森元 美代治さん（NGO IDEA ジャパン代表）

(4)「学生ボランティア対象 SDGs 研修会」の実施

学校法人聖学院は 2018 年 4 月、グローバル・コンパクトに署名・加入した。全学で SDGs 推進に取り組みはじめたことを契機として、日頃ボランティア活動に取り組む学生たちに自身の活動と SDGs が掲げる目標を照らし合わせ、活動をより豊かにすることを目的とした研修会を昨年に引き続き実施した。

日程：2019 年 9 月 24 日（金）10:00～16:00
場所：聖学院大学 1cafe
対象者：ボランティア・まちづくり活動助成金助成団体
参加者：学生 25 名（13 団体）
講　師：NPO 法人エコ・コミュニケーションセンター代表　森良氏
内　容：・アイスブレイク
・ワーク①「わたしがやりたいことと世界の課題（SDGｓ）」
・ワーク②「自分たちの活動を発展させるための課題や活動の場を持続可能で豊なものにするために必要なことを考えよう」
・発表
・ふりかえり

参加学生感想：・ちいさなことが世界とつながっているという驚きがあった
・自分たちの欲と世界・社会の問題のつながりに気づいた
・自分の「好き」が誰かの役に立つと思った

2. 学内の諸ボランティア活動の連絡、協力および支援に関する事業

(1)学生サポートメンバー(サポメン！)との連携

学生サポートメンバー（通称：サポメン！）は、聖学院大学におけるボランティアの活性化を目的として組織され、現在はサポメン５期生～8 期生を中心に、自分たちにできる活動を実施している。本年度は「ボラ Tea」「ボラ年会」等の活動に加え、留学生サポメンの提案で留学生対象のボランティア紹介イベント「留学生のみなさんボランティアしようよ」を実施した他、地域イベントへの協力もこれまでに引き続き行った。また、センター主催で開催された「ボランティア・まちづくり活動助成事業公開審査会＆ドネーションパーティー」の実施について連携を図った。

ｉ）ボラ Tea

学内・外で聖学院生が組織している団体の活動を紹介する場を設けることを目的に、4 月、7 月の２回実施した。

①　「新歓ボラ Tea」

新入生を主な対象として、学内・外で聖学院生が活動しているボランティア団体の紹介と勧誘等を行った。

日　時　：１日目　2019 年４月 12 日（金）15:30～19:00
　　２日目　2019 年４月 15 日（月）15:00～18:30

場　所　：１号館地下 1cafe

内　容：聖学院生が関わっているボランティアグループの紹介

参加団体：・学内団体
　　ボランティアアソシエーション・GRACE、復興支援ボランティアチーム【SAVE】、STEP、防犯パトロールチーム STOP!、Heart&Smile、ムーミンの会
　　・外部団体
　　埼玉県警察ヤング防犯ボランティア「クリッパーズ」、埼玉県警察少年非行防止学生ボランティア「ピアーズ」、埼玉県警察危機管理支援学生ボランティア「シームス」、彩の国きずなウォーク

参加者：１日目　30 名
　　（内訳：来場学生８名、団体所属学生 15 名、外部５名、教職員２名）

２日目　50 名

（内訳：来場学生 27 名、団体所属学生 22 名、外部 1 名）

②　「七夕ボラ Tea」

学内・外で聖学院生が活動しているボランティア団体の紹介と勧誘等を行った。

日　時：2019 年 7 月 10 日（水）10:40～12:45

場　所：1 号館地下 1 cafe

内　容：・学内団体によるボランティア募集

・夏のオススメボランティアの紹介

・ボランティアをするにあたって諸注意

・各ブースでのフリートーク

発表団体：・学内団体

ボランティアアソシエーション・GRACE、復興支援ボランティアチーム【SAVE】、STEP.、児童文化研究同好会てふてふ、Heart&Smile、防災戦隊マモルンジャー、チーム釜フェス、しゅわっち

・外部団体

認定 NPO 法人 CFF ジャパン、生活介護とさき

参加者：48 名

（内訳：来場学生 11 名、団体所属学生 31 名、外部 3 名、教職員 3 名）

ii）留学生のみなさん、ボランティアしようよ

留学生のサポメン！の提案をきっかけに、留学生センターに協力してもらい、ボランティア活動に取り組む留学生による留学生向けのボランティア紹介イベントを実施した。

日　時：2019 年 11 月 12 日（火）12:20～12:55

会　場：留学生センター

内　容：・留学生によるボランティア体験談の紹介
・ボランティアに関する質問コーナー
・募集中のボランティア活動の紹介
参加者：32 名（内訳：留学生 21 名、サポメン！８名、教職員３名）

ⅲ）ボラ年会

ボランティア団体や個人で活動するボランティア同士の交流と親睦を目的に、忘年会を実施した。

日　時：2019 年 12 月 16 日（月）18:00～20:00
会　場：１号館１cafe、1104 教室
参加者：28 名（内訳；学生 27 名、教職員１名）
内　容：・活動の振り返りと共有（ボラ年表づくり）
・夕食タイム
・ボランティアクイズ（各ボランティア団体から出題）

ⅳ）ボランティア・まちづくり活動助成公開審査会＆ドネーションパーティーの運営協力

公開審査会＆ドネーションパーティーの運営協力を通じて、来場された地域の方々や申請団体との交流の機会を持った。

実施日：2019 年６月 15 日（土）

ⅴ）新入生を対象とした宣伝活動

新入生に対し、大学にボランティア活動支援センターがあることと、ボランティア活動の魅力を伝えるべく、入学直後のガイダンス等で、宣伝活動を行った。今年も「サポメンジャー」が登場し、ミニ演劇を通じてボランティアの魅力を語り、さらに翌週に開催予定の「新

歓ボラ Tea」の案内を行った。

・活動内容

「学生支援ネットワーク説明会」での動画を使ったセンター紹介

日程：2019 年４月８日（月）

vi）サポメンミーティング、強化合宿実施日程と内容

・ミーティング

毎週１回昼休み、企画に応じて随時ミーティングを行った。

・強化合宿

2020 年３月９日（月）～10 日（火）に実施予定だった合宿については新型コロナウイルス感染症拡大を受けて中止とした。

vii）行政、市民活動団体との連携

行政や市民活動団体からお声掛けいただき下記の連携活動を行った。

・上尾市消費生活展実行委員会主催「第 36 回上尾消費生活展」への参加

日程：2019 年 11 月 23 日（金）、24 日（土）

場所：上尾市コミュニティセンター

内容：サポメンジャーでイベント会場やステージを盛り上げる

着ぐるみボランティア

かえっこバザールの運営補助

viii）成果と課題

・「新歓ボラ Tea」については、天候のせいか出足は悪かったが、トータルでは過去最高だった昨年（44 名）に次ぎ、多くの新入生が参加した。学生ボランティア団体に興味を持ち、その場での入会を希望する新入生が多く目立った。また、世代交代したボランティア団体の体制作りの良い機会となった。新代表同士も知り合うことができた。

・「七タボラ Tea」については、今年度新たに加わったサポメン！８期生が、すぐ役割を得て現サポメン！とともに運営を担い、同じサポメンとして関係をつくる良い機会となった。サポメンほぼ全員（14 名）が運営に参加した。４月に実施した「新歓ボラ Tea」よりも、学内の参加団体数が増えた（６団体→８団体）。また、各団体からの参加人数も増え、「ボランティア・まちづくり活動助成金審査会」からの良い流れがあった。来場学生の参加は少なかったが、個別相談に乗ることができ、具体的なアクションにつながりそうな学生がいた。

・「留学生のみなさんボランティアしようよ」については、サポメン！８期生となった留学生の「もっと留学生にボランティア活動に興味を持って参加してほしい。」という想いを現サポメンが応援するかたちで実現することができ、サポメン！間の結束を深める機会

となった。また、会を実施してみるとボランティア活動への関心が高い留学生が予想以上にいることが分かった。今後も、留学生が気軽に出入りしやすい留学生センターに協力してもらいこのような会を実施していきたい。

(2)ほたる祭りの実施

大学周辺には 1960 年代までは近隣にホタルが生息していたものの、環境の変化で絶滅の危機に瀕した。そこで、ホタルを再生させる取り組みを 2003 年からスタートさせ、翌年 2004 年にホタルが集うための水辺「ホタルのビオトープ ～ひかりのせせらぎ～」を大学内に完成させた。ホタルの飛翔を地域の方とともに楽しむ企画として、学生と教員が連携し、2004 年より鑑賞会「ほたる祭り」を毎年実施し、近隣地域の方々に好評を得ている。

ボランティア活動支援センターでは、「ほたる祭り」の企画・運営に取り組む学生実行委員の活動支援を行っている。

日　時：2019 年6月8日（土）18:00～20:30（鑑賞会は 19:30～20:30）
会　場：ホタルのビオトープ ～ひかりのせせらぎ～、4 号館食堂、図書館前
参加者：・来場者数：約 300 人
　　・学生：約 35 名（ほたる祭り実行委員会、政治経済学科平ゼミ、演劇部、当日ボランティア他）
実施体制：・主催：ほたる祭り実行委員会
　　・共催：ボランティア活動支援センター／地域連携・教育センター
内　容：・ゲンジホタルの鑑賞会演劇
　　・演劇部による朗読劇
　　・遊びコーナー
　　・模擬店

(3)授業等への協力

聖学院大学では、ボランティアをテーマにした授業が複数実施されている。教員より依頼を受けて、次の授業にてボランティア活動支援センターの紹介やコーディネーターの職能などについて話をした。

日にち	授業名	対象学生	担当教員	講義内容
５月 17 日(金)	国際ボランティア入門A	欧米文化学科	金沢はるえ講師	センターの紹介と身近なボランティア活動について
５月 22 日(水)	共生社会総論	心理福祉学科１年生	田村綾子教授	
５月 30 日(木)	釜石学	全学	渡辺正人教授	震災とボランティア―阪神淡路大震災から東日本大震災を巡って
６月 13 日(木)				東日本大震災とボランティア活動―本学も含めて
６月 27 日(木)				釜石市における復興支援ボランティア活動
７月 10 日(水) 24 日(水)	社会への扉をひらく	政治経済学科１年生	平修久教授	センターの紹介と身近なボランティア活動について
10 月 11 日(金)	国際ボランティア入門B	欧米文化学科	金沢はるえ講師	秋のボランティア活動について
10 月 16 日（水）	専門演習Ⅰ(生活支援論)	人間福祉学科	小沼聖治助教	センターの紹介と身近なボランティア活動について
１１月１９日（火）	ボランティア論	全学	川田虎男講師	ボランティアコーディネーターの役割
12 月６日(木) 12 日(木)	キャリアデザインB	政治経済学科２年生	江川裕子講師 萬年山啓講師	自身のキャリアについて
2020 年 １月 29 日(水)	社会福祉援助技術演習	社会福祉士を目指す２年生	猪瀬桂二准教授 小沼聖治助教 長谷部雅美助教	・ボランティア活動をするにあたって ・春休みにできるボランティア紹介

(4)ボランティア・まちづくり活動助成事業の実施

ｉ)実施概要

活発にボランティア活動に取り組む学生が一人でも増えること、助成金申請を通して、自分たちの「伝える力=プレゼン力や事業計画づくり」を磨くとともに、地域の方々や先

輩・教職員等多くの人が応援していることを実感すること、さらに、地域の方々に、学生の取り組みについて知っていただくことを目的として本事業を実施している。また本事業はボランティアグループに限らず、教育活動の一環として地域貢献にかかわるゼミについても本助成金の活用が広がるよう推進している。実施にあたっては本学同窓会と共催し、学生たちへの助成金 30 万円の支援をいただいた。また、公開審査会の際には来場者が任意で学生を直接応援できる「ドネーションパーティー」を導入し、学生と地域の方々が直につながるきっかけづくりに取り組んでいる。

今年度は新たな取り組みとして、上尾市社会福祉協議会に協力いただき、地元上尾市で活動する団体を対象に、赤い羽根共同募金からの助成金を受けられることとなった。過去募金活動に参加した中学生が審査員になることで、より地域に根差した視点や地域から応援されている実感を持って活動に取り組んでもらう機会とした。

ⅱ)実施内容

①実施スケジュール

日にち	実施内容
5月13日(月) 15日(水)	説明会兼研修会 応募を予定している学生グループを対象に応募概要の説明とプレゼンテーション講習を行った。
6月5日(水)～ 7日(金)	公開審査会リハーサル 申請団体を対象に審査会本番を想定して発表練習の時間を持った。
6月15日(土)	公開審査会＆ドネーションパーティー 第1次審査では申請団体のプレゼンテーションと書類をもとに、同窓会からの助成金については審査員、学生審査員（各申請団体）が審査し、ポイント数によって助成金の交付、未交付を決定。赤い羽根助成金については中学生審査員が審査し、ポイント数によって交付額を決定。 さらに2次審査では同窓会からの助成金交付決定団体への助成金額を審査員で話し合い、発表を行った。 また、直接学生を応援できるドネーションパーティーを開催し、来場者と申請団体の学生たちとの交流会も実施した。
6月20日(木)	助成金交付式 同窓会からの助成金、赤い羽根助成金交付団体に対して、助成金の交付を行った。また助成金の使用用途や報告書類の記入方法について説明を行った。
10月1日(火) 10月19日(土)	上尾市社会福祉協議会呼びかけによる赤い羽根共同募金運動への参加 赤い羽根の助成を受けた団体に所属する学生たちが上尾駅で行われた街頭募金活動に参加した。
2020年 1月10日(金)	活動報告会 助成金交付団体による活動報告会を実施。審査員をはじめドネーションパーティーに参加した地域の方々にも来場いただいた。審査委員には各活動について講評をいただき、後日学生たちへフィードバックした。

②審査員

NO	選出枠	肩　　書	氏名（敬称略）
1	大学同窓会	副会長	秋谷大輔
2	ボランティア応援卒業生	釜石リージョナルコーディネーター（釜援隊）	由木加奈子
3	地域	上尾市ボランティア連絡会会長	本城文夫
4	地域	さいたま北商工協同組合　副理事長	新井一年
5	専門家（NPO 関係）	NPO 法人アクションポート横浜 代表理事	高城芳之
6	専門家（ボランティア関係）	社会福祉法人上尾市社会福祉協議会上尾市ボランティアセンター	岡田淳一
7	大　学	副学長 ボランティア活動支援センター所長	平修久
8	大　学	地域連携・教育センター副所長	猪狩廣美

③中学生審査員

赤い羽根共同募金活動経験者である上尾市立南中学校の生徒４名

④申請内容と助成額

NO.	団体名	事業名	申請額	決定額	赤い羽根	寄付金（ドネーション）	合計
1	Heart&Smile	イベントを通して地域交流活性化を目指し、笑顔を届ける。	50,000 円	17,500 円	1,500 円	8,000 円	27,000 円
2	防災戦隊マモルンジャー	日常生活を見直して、次につなげる	50,000 円	50,000 円	3,500 円	15,000 円	68,500 円
3	バッファローあげお	上尾市内在住外国人の調査：多文化共生施策の認知度、評価、潜在的ニーズを中心に	50,000 円	20,000 円		18,000 円	38,000 円
4	こども・あそびラボ	子どもと遊び支援	50,000 円	25,000 円		10,000 円	35,000 円
5	児童文化研究同好会てふてふ	親子で楽しむ会	30,000 円	12,500 円		10,000 円	22,500 円
6	キッズかけっこ教室（陸上競技部有志）	キッズかけっこ教室（陸上競技部有志）	50,000 円	50,000 円		17,000 円	67,000 円
7	パワフルキッズ	しらこばと遊び広場	40,000 円	10,000 円	3,000 円	9,000 円	22,000 円
8	チーム釜フェス	釜石フェスティバル 2019	50,000 円	22,500 円	500 円	17,000 円	40,000 円
9	若者の就労支援ネットワークムーミンの会	新たな可能性を明日へ繋ぐ	40,000 円	17,500 円	2,000 円	28,000 円	47,500 円
10	ボランティアアソシエーション・GRACE	GRACE ボランティアプロジェクト	50,000 円	17,500 円	1,500 円	9,000 円	28,000 円
11	復興支援ボランティアチーム SAVE		30,000 円	12,500 円		16,000 円	28,500 円
12	Unity(ユニティー)	地域活動支援センターベルベッキオ 交流事業	50,000 円	22,500 円		26,000 円	48,500 円
13	防犯ボランティアチーム STOP!	防犯啓発プロジェクト	40,000 円	10,000 円	500 円	11,000 円	21,500 円
14	empower	フェアトレード	50,000 円	0 円	2,500 円	15,000 円	17,500 円
15	アッピー応援隊	アッピー応援隊	21,000 円	12,500 円	3,000 円	7,000 円	22,500 円
			合計	300,000 円	18,000 円	216,000 円	534,000 円

ⅲ）助成金を受けた主な団体の活動実績

① 防災戦隊マモルンジャー

助成額：同窓会より 50,000 円

赤い羽根より 3,500 円

埼玉県防災学習センター、埼玉県立日高特別支援学校、上尾市尾山台団地自治会と連携し、ヒーローショーを通じて防災の大切さを発信し、好評を得た。活動場所ごとに対象も異なるため、楽しく分かりやすくをモットーに都度内容を調整するなどの工夫を行った。

② 児童文化研究同好会てふてふ

助成額：同窓会より 12,500 円

児童学科の学生たちが中心となり、日頃の学びを活かして、絵本サロンや季節行事を実施している。今年度は新たに NPO 法人ワーカーズコープ和光地域福祉事業所の依頼を受けて、和光市内の子どもたちを対象にクリスマス会を実施した。

③ 聖学院大学ボランティアアソシエーション・GRACE

助成額：同窓会より 17,500 円

赤い羽根より 1,500 円

GRACE ではこれまでつながりのある施設等で継続してボランティア活動に取り組んできたが、今年度はそれらの活動に加えて、積極的に地域の方々とつながり、様々な場所でボランティア活動に取り組んだ。

④ Unity(ユニティー)　助成額：同窓会より 22,500 円

主に精神疾患をお持ちの方々が通所する医療法人大壮会地域活動支援センター「ベルベッキオ」と連携し、利用者の方々や職員との交流を図るクリスマス会を実施し、精神疾患をお持ちの方々やその方々に関わる福祉職への理解を深めた。

ⅳ）助成事業に関わった方々の声

①申請団体の声

- 応援してくださる人がいるということを実感し、感謝と共に、心強さを感じました。
- 別の団体の顧問の先生や、職員から寄付をいただいたのも嬉しかったが、何より自分たちが活動に参加したことがない地域の団体の方から応援と、「よかったら、これから来てね。」と言われたことが嬉しかった。

・皆さんの支援があり無事に事業を実施することができました。活動の中で失敗などもありましたが、成し遂げたかった願いを叶えることができたため本当に感謝しています。
・私たちにチャンスをいただきありがとうございます。この活動のおかげでいろいろなことを学びました。また、チームの団結力を高めることができました。

②審査委員・地域の方の声

・イベントに合わせて台本をはじめ内容を変えていることはすばらしい。対象者の幅を広げながら、活動を展開してほしい。
・精神障害者について、とても理解をして勉強をされていて、よかったです。期待しています。上尾でも活動してほしいです。
・かけっこに貢献しているのがとてもいいなと興味あります。又、地元でもぜひ、小学校や中学校などでやってもらえたら喜ばれると思います。
・子どもたちが自由に自然の中で遊ぶのは非常に大切です。ぜひこれからも子どもと遊んで下さい。
・自学科の特色を生かしていてよかったです。とても活動がよく見えました。たくさん活動してほしいです。

ｖ）成果と課題

・過去最高の 15 団体の申請があり、うち 6 団体は初めての参加となり、助成金制度が学生の活動に弾みをつける効果を感じることができた。
・今年度初の試みとして、赤い羽根募金活動経験者である上尾市立南中学校の生徒 4 名を審査員として迎え、上尾で活動する学生ボランティア団体を対象として選考した。中学生からの質疑は思いのほか鋭く、学生には良い刺激となった。
・審査会に来場された近隣自治会や高齢者福祉施設、審査員として参加くださった、さいたま北商工協同組合や上尾市社会福祉協議会から直接、学生団体に活動依頼のオファーがあり、学生と地域の方々のつながりがより深まる機会となった。また、依頼があることで学生たちには今後の活動への励みとなった。後日審査員を行った中学生と赤い羽根の助成を受けた団体が協力して、上尾駅前で街頭募金活動のボランティアを行った。
・課題としては、15 団体が申請したことで審査会が大幅に延長することとなり、来場者や審査員に多くの負担をかける結果となった。今後は、15 団体以上の申請を見込んで、来年度は開始時間を午前中に変更することなど、運営スタイルを都度見直すようにしたい。

(5)聖学院大学復興支援ボランティア交通費補助金

ⅰ)実施概要

東日本大震災の被災地における復興支援ボランティア活動に取り組む本学の学生に対して交通費の補助を行っている。

ⅱ)補助の概要

- １年間に２回まで東日本大震災をはじめとした自然災害に関わるボランティア活動の交通費について、往復の場合は 15,000 円、片道の場合は 7,500 円を上限に補助を行う。
- 補助に当たっては、事前に申請を行い、センター運営委員会にて決定する。
- 補助を受ける者は、「活動証明書」「領収書」「活動レポート」の提出が求められる。

ⅱ)実　績

年間利用件数	のべ 22 名	
年間補助総額	273,400 円	
主な活動先	笹屋敷町内会（宮城県仙台市）	４名
	田野畑村立若桐保育園／たのはた児童館（岩手県田野畑村）	３名

3. 復興支援ボランティア事業

復興支援ボランティアスタディツアー「よいさっ！プロジェクト 6」参加レポートより

私は所属しているグレイスの定例会でこのツアーの存在を知った。そして、その定例会ですぐに行こうと決意し行動に移した。

中学時代からボランティアには参加していて、ボランティアというものに対して、自分の中での敷居が低かったと言うこともあるが、私は高校時代に宮城県女川町に旅行に行くなど震災や震災ボランティアと言う自分の中での未知の存在に興味があった。また震災からもうすぐ１０年という土地に関心があり参加してみたいと思ったからでもある。

しかし、関心といっても当時、自分は小学生で、当時のことははっきり覚えていない。ただ大きな地震で校庭に避難し、家に帰るとそのニュースでもちきりだったことしか記憶にない。あれから、日本ではいろいろな災害などが起きているがそれらすべて自分にとって、どこか他人事で終わっている自分に大学生の自分は疑問を持ち、今まで踏み出せなかった一歩を踏み出だせたともとれるかもしれない。

現地の活動では、様々な「生の声」に心動かされた。復興を感じる中、所々現地でしかわからない空気感があった。津波など、本当に被害があった場に行くと見た目は復興しているのに何かを感じる矛盾がありとても自分の中での整理が難しかった。また、現地の人の言葉は重く感じて自分がテレビなどで知った震災とは違った震災の本質のようなものを知れた気がした。

私の家族はどちらかというと仲のいいほうだと思う。しかし、だからこそといってもいいのかもしれない、私はなんだか照れくさくて家族と真剣な話合いをしない。また普段の学校生活のこと対人関係について、アルバイトについてなど、進んで全員と話すことはまずない。ボランティアや旅行から帰って来て、家族に学びを共有するときなどないのだ。しかし、今回はそれではいけないと思い、家族と今回のツアーについて話す時間をつくった。そうすると家族と情報を共有するだけでなく、家族それぞれの見方に驚かされたりと、思っていた以上の学びがあった。

ここから自分が感じた（この文を通して伝えたい）ことは、「自分の成長」と「家族との共有と言うこのツアーに行く前にはもっていなかった物」を得たということだ。小さな変化かもしれないが自分の中では大きな変化でそれほどまでにこの四日間は自分にとって大きかったと感じた。また、今後の学生生活の中では、「よいさっ！」以外のボランティアや様々な災害関係の行事等に積極的に参加して行こうと思う。

児童学科１年　金久保　仁　（2019 年 8 月）

(1)東日本大震災復興支援ボランティアスタディツアーの実施

2011 年８月より、本学ではボランティアスタディツアーを実施している。今年度は、春、夏、冬と、計３回のツアーを実施した。実施にあたっては、岩手県釜石市を拠点に活動する一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校の現地コーディネート協力と、釜石市の後援を受けている。釜石市とは、2014 年１月に連携協定を締結している。

また、ツアーの企画と運営は学内のボランティア団体「復興支援ボランティアチーム【SAVE】」と協働で取り組んだ。

ｉ)桜プロジェクト 8

釜石市鵜住居地区における生活再建への支援の一環として学生発案による「桜プロジェクト」が 2012 年の初めに立ちあがり、さいたま市北区盆栽町にある「清香園」の協力を受け、「盆栽桜を届ける」企画として実現し、昨年度まで実施してきた。今年度は新たに、「清香園」との協働企画としてこれまで盆栽桜をお届けしてきた皆様に盆栽のお手入れ方法をお伝えする「盆栽講座」を実施した。

また、今回のプロジェクトは一般学生への募集はせずに、復興支援ボランティアチーム【SAVE】と教職員で実施した。

① ツアーの実施

・ツアー日程：2019 年４月 20 日（土）朝～21 日（日）夕方　現地集合・解散
・活動場所：岩手県釜石市鵜住居地区
・宿泊：４月 20 日　一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校
・活動内容：
　―盆栽講座（鵜住居地区生活応援センター）
　　清香園の山田寅幸氏がこれまで盆栽桜をお届けしてきた皆様に桜盆栽の育て方・手入れの仕方についてお伝えする講習会を実施した。
　―盆栽桜の植樹（鵜住居地区生活応援センター）
　　鵜住居地区生活応援センターの敷地内にて盆栽桜の植樹を行った。
　―鵜住居駅周辺施設の見学
　　2019 年３月に新たに開設された釜石市の東日本大震災伝承施設「いのちをつなぐ未来館」等、駅周辺施設の見学を行った。
　―「原木しいたけ再生プロジェクト」のお手伝い
　　かつて盛んだった原木しいたけ栽培の復活にむけて栽培や林の整備に取り組むプロジェクトのお手伝いを行った。
・参加者数：学生６名、教員３名、職員３名　計 12 名

ⅱ)よいさっ！プロジェクト６

震災から２年の 2013 年８月に復活した釜石の夏の風物詩である「釜石よいさ」に踊り手として参加することや、震災学習、地元の方々との交流をメインとしたプロジェクト。昨年度に引き続き自由の森学園高等学校、聖学院高等学校の生徒も参加した。

① プロジェクト会議の実施

３校内でプロジェクトリーダーを選出。プロジェクトリーダーと３校の教職員で月１回程度の合同会議を実施。また本学においては週１回ペースでプロジェクトリーダー会議を独自に行った。さらには現地の下見を本学のプロジェクトリーダーと教職員で行い、ツアーのプログラム作りを行った。

・合同会議：５月 25 日(土)、６月 22 日(土)、７月 13 日(土)
・プロジェクトリーダー会議：５月 23 日(木)、29 日(水)、６月 13 日(木)、20 日(木)、
27 日(木)、７月４日(木)、11 日(木)、18 日(木)
毎回２時間半程度　計８回
・下見：７月６日（土）～8 日（月）

② 「星に語りて」上映会の実施

当プロジェクトのなかで今回初めて障がい者との交流企画を持つこととなったことを経緯として、大災害が起きた時に、障がいのある人達はどんな局面に立たされるのかを学ぶ機会として、東日本大震災時の障がいのある人と支援者の物語を描いた「星に語りて」（制作：きょうされん）の上映会を行った。なおこの上映会に関しては、心理福祉学科、人間福祉学科、こども心理学科との共催で実施。ツアー参加者のみならず、広く学内や地域の方々に呼びかけを行った。

・主　催：心理福祉学科／人間福祉学科／こども心理学科／
ボランティア活動支援センター
・日　時：７月 31 日(水) 10:40～12:50
・場　所：1cafe
・解　説：坂本佳代子講師
・参加者：約 50 名

③ ツアーの実施

・ツアー準備会（本学のみ）：７月 17 日（水）

・ツアー事前学習会（３校合同）：７月 21 日（土）
・ツアー日程（３校合同）：８月２日（金）～5 日（月）
・活動場所：岩手県釜石市鵜住居町・大只越町・宮城県石巻市ほか
・宿泊：８月２日（金）～4 日（日）釜石市民交流センター（大学のみ）
　　８月４日（日）～5 日（月）南三陸まなびの里いりやど（３校合同）
・活動内容：

―慰霊施設訪問と仙寿院住職のお話（大平墓地公園、仙寿院）

釜石市内で発見された震災犠牲者のうち身元が判明していない１０人のご遺骨が納骨されている慰霊施設を訪問。またこのご遺骨を７年以上にわたり保管されてきた仙寿院の柴﨑住職に震災当日お寺を避難所として開放されたことからこれまでのことについてお話を伺った。

―活動①（5 つの活動から１つ選択）

ⅰ．釜石の“できごと”をたどる（鵜住居町、三陸鉄道）

東日本大震災発災当日、鵜住居地区で起きたできごとについて、当日消防団として動かれた前川智克さん、子ども達の避難を手伝った民生委員・児童委員の両川吉男さんと歩いてたどった。その後室内にて、前川さんに詳しいお話を伺い、終了後、三陸鉄道の鵜住居駅～釜石駅間を乗車した。

ⅱ．釜石魅力発見！弾丸ツアー（釜石大観音と仲見世通り、鉄の歴史館、三陸鉄道、釜石鵜住居復興スタジアム、根浜海岸など）※大学生のみ

「鉄と魚とラグビーのまち」で知られている釜石の魅力に迫る企画として、０店舗商店街の復活に関わり、商店街の一角でゲストハウス「あずま家」を運営している東谷いずみさんにお話を伺ったほか、釜石大観音や鉄の歴史館、鵜住居復興スタジアムの見学、三陸鉄道の釜石駅～鵜住居駅間を乗車した。

ⅲ．出張！釜石学＆釜石ラグビーを盛り上げる活動

（鵜住居地区生活応援センターとその周辺）※大学生のみ

前半は、釜石の皆さんとともに釜石鵜住居復興スタジアム周辺のラグビー応援のためののぼりたて活動を行った。そして後半は、聖学院大学で開講している渡辺正人教授による釜石学を出張版として実施。授業の中では、釜石の皆さんに個々でお話を聞かせていただく時間を持った。

ⅳ．“よいさ”で出店を出そう―障がいのある方々との交流―

（グループホームくろーばー、しゃくなげ愛育園、創作農家こすもす、釜石よいさ会場など）※大学生のみ

坂本佳代子講師とともに前半は、釜石市内の障がい者施設を訪問し、障がいのある方々との交流を行った。途中、坂本講師によるマニュアックツアーをはさみ、後半は釜石よいさ会場にて障がい者施設の出店を出すお手伝いや宣伝活動を行った。

ⅴ．「釜石よいさ」スタッフとして活動（釜石よいさ会場）※大学生のみ

釜石市民の方々、全国から来たボランティアと共に「釜石よいさ」を支える裏方として活動した。

―「釜石よいさ」への参加

震災以前から、釜石の夏の風物詩として行われてきた夏祭り「釜石よいさ」。2013年、釜石の若手を中心に復活させた、この祭りを釜石の方々とともに踊り手として参加した。

―活動②（３つの活動から１つ選択）

ⅰ．復興公営住宅の方々との花植えと交流会(県営嬉石第１アパート)

前半は、住民の方々と共にプランターに花を植える活動を行った。後半は、集会室に移動し、自由の森学園高校生の進行で交流会を実施した。

ⅱ．命をつなぐレンジャーショー＆防災工作（いのちをつなぐ未来館）

今年３月に開設した、釜石市の東日本大震災伝承施設「いのちをつなぐ未来館」にて３校合同の防災と命の大切さを伝えるレンジャーショーと、防災に役立つ工作を実施した。

ⅲ．「原木しいたけ再生プロジェクト」のお手伝い

かつて盛んだった原木しいたけ栽培の復活にむけて栽培や林の整備に取り組むプロジェクトのお手伝いを行った。

―旧大川小学校フィールドワークと「未来をひらく」話し合い

（旧大川小学校、石巻・川のビジターセンター）

旧大川小学校で震災時起きたできごとについて、語り部として活動されている佐藤敏郎先生と、震災当日奇跡的に助かった只野哲也さんに校舎を案内いただきながらお話を伺った。また、フィールドワーク終了後、室内に移動して大川小の校歌のタイトルにあった「未来をひらく」という言葉と向き合い、話し合いを行った。

―活動のふりかえり（８月４日夜、帰りのバス内）

・参加者数：聖学院大学　学生 21 名、教員５名、職員７名、カメラマン１名

聖学院高等学校　生徒９名

自由の森学園高等学校　生徒９名、教員１名　　合計 53 名

④　ツアー実施ふりかえり

ツアー実施に向けた企画の段階からツアーの総括として、３校のプロジェクトリーダーと教職員ともに振り返りの時をもった。

日時：８月 20 日（火）13:30～16:30

ⅲ）サンタプロジェクト 9

毎年の恒例となった釜石・大槌郷土料理研究会のお母さんたちに教わる郷土料理づくりや、サンタプロジェクトをはじめた 2011 年から毎年実施している「こどもクリスマス会」など交流をメインとしたプロジェクト。

① クリスマスカードの製作

学生がデザインしたオリジナルのクリスマスカードを製作し、ツアーに参加する学生のメッセージを記入したものを、ツアー中に出会った方々にプレゼントした。

② プロジェクト会議の実施

復興支援ボランティアチーム【SAVE】内でプロジェクトリーダーを選出。そのプロジェクトリーダーとともに、週 1 回程度、企画会議を開催、ツアーのプログラム作りを行った。

・企画会議：10 月 17 日(木)、23 日(水)、30 日(水)、11 月 7 日(木)、14 日(木)、
　　20 日(水)、27 日(水)　の毎回 2 時間半程度　計 7 回

③ 1 年生必修授業内でのツアーPR 実施

1 年生の必修科目「キリスト教概論」授業を中心に、学院広報センターが制作したツアー紹介動画上映とコーディネーターや復興支援ボランティアチーム【SAVE】の学生からツアーの宣伝を行った。

④ ツアーの実施

・ツアー準備会：　11 月 20 日（水）
・ツアー日程：11 月 29 日（金）～12 月 1 日（日）
・活動場所：岩手県釜石市鵜住居町ほか
・宿泊：11 月 29 日車中　11 月 30 日釜石市民交流センター
・活動内容

―事前学習（11 月 29 日夜）

―被災地見学（釜石市役所横高台、旧大槌町役場跡地）

2011 年 3 月 11 日に何が起きたのか。当日釜石の人々が避難した釜石港を見渡す高台にのぼり、震災当時のことについて、一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校代表の伊藤聡さんにご案内いただいた。さらに釜石の隣町大槌町に移動し、東日本大震災の津波で当時の町長と職員多数が犠牲となった旧役場跡でお話を伺った。

―活動①（2 つの活動から 1 つ選択）

ⅰ．現地の方々との郷土料理づくり（鵜住居町　根浜レストハウス）

釜石・大槌郷土料理研究会のお母さん方に釜石に伝わる郷土料理の作り方を伝授いただき、教わったことを後日レシピにまとめてお届けしたほか、新たな取り組みとして活動の様子を紹介する動画作成も行った。

ⅱ.「原木しいたけ再生プロジェクト」のお手伝い

かつて盛んだった原木しいたけ栽培の復活にむけて栽培や林の整備に取り組むプロジェクトのお手伝いとして、今回は台風 19 号の被害を受けた部分の復旧作業を行った。

―釜石の今を知るフィールドワーク（片岸海岸防潮堤、釜石鵜住居復興スタジアム）

一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校代表の伊藤聡さんのご案内で、東日本大震災の際に到達した津波によって壊れた後に、地域住民と行政との話し合いのもと、再建を行った防潮堤の見学と、今年ラグビーワールドカップの会場となったスタジアムの見学を行った。

―活動②（2 つの活動から 1 つ選択）

ⅰ. 震災学習とボランティアフィールドワーク

（旅館宝来館裏山「命の道」、いのちをつなぐ未来館）

一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校（さんつな）代表の伊藤聡さんのご案内で、伊藤さん自身も震災当時避難した宝来館裏山「命の道」を見学後、いのちをつなぐ未来館にて、さんつなの取り組みについて紹介いただいた。

ⅱ.「釜石のこれまでとこれから」（鵜住居地区生活応援センター）

本学のボランティアスタディツアーを開催当初から支えてくださっている釜石市鵜住居地区主任児童委員の市川淳子さんに、聖学院大学と釜石のこれまでの歩みと釜石のこれからについてお話しいただいた。

―選択活動③（2 つの活動から 1 つ選択）

ⅰ.「こどもクリスマス会」（鵜住居地区生活応援センター）

鵜住居地区の子どもたちを対象に学生企画のクリスマス会を行った。

ⅱ.「原木しいたけ再生プロジェクト」のお手伝い

―活動のふりかえり（11 月 30 日夜、12 月 1 日帰りのバス内）

・参加者数：学生 27 名、教員 4 名、職員 4 名　合計 35 名

⑤ ツアー実施ふりかえり

ツアー実施に向けた企画の段階からツアーの総括として、復興支援ボランティアチーム【SAVE】プロジェクトリーダーとともに振り返りの時をもった。

日にち：12 月 5 日（木）

ⅳ）成果と課題

- 震災から９年を経て、釜石ではラグビーワールドカップ2019が開催された。震災以降釜石ではこのワールドカップの開催を目標に復興を進めてきた経緯がある。2011 年から関わっている本学にとっても、急速に復興を遂げ世界中から注目されるイベントを開催するに至った釜石の歩みへの敬意と僅かながらでもその過程に関われたことに感謝したい。
- 同時に当初２日予定されていた試合は、台風19号の影響により１試合が中止となってしまった。台風被害では、死傷者もでてしまい、再開したばかりの三陸鉄道も再度不通になるなど、大きな被害をもたらした。困難の続く釜石に対して、微力ではあるが引き続き関り続けることを確認する出来事にもなった。
- 「よいさっ！プロジェクト６」のなかで参加した「釜石よいさ」では、自発的に10名以上の卒業生が現地に集い、後輩たちのサポートに当たっていたことは、これまで積み上げてきたことの成果であったと感じられる。
- ラグビーワールドカップ開催を受け、釜石も確実に次のステージに変化している。センターとしても今後ツアーの実施方法や具体的な関り方について、これまで以上に変化が求められていることを実感した。今後も、現地の復興とニーズの変化に寄り添いながら、関りを続けていきたい。

（２）釜石「キッズかけっこ教室」の実施

昨年度に引き続き、社会福祉法人愛泉会かまいしこども園の園児を対象とした「キッズかけっこ教室」を陸上競技部とボランティア活動支援センターの共催により実施した。

- 日程：８月30日(金)～９月１日(日)
- 活動場所：釜石市立釜石小学校ほか
- 宿泊：釜石市民交流センター
- 活動内容
  ―前日準備
  ―かけっこ教室
  ―被災地見学

（鵜住居復興スタジアム、いのちをつなぐ未来館、上閉伊郡旧大槌町など）
・参加人数：陸上部員４名、卒業生１名、陸上部顧問１名、職員２名　　計８名

(3)釜石の高校生×聖学院生による釜石〇〇プロジェクトの実施

このプロジェクトは、被災地支援・インターンシップの一環として、釜石の高校生と受講生の学生が、釜石のまちを盛り上げるプロジェクトの企画を立て、その実現については、ボランティア活動として位置付け活動を展開した。実施に当たっては、一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校、釜石リージョナルコーディネーター（釜援隊）協議会と共催し、釜石市の後援をいただいた。

ⅰ）プロジェクトを考える合宿（被災地支援・インターンシップの一環）
・日程：８月６日(火)―７日(水)
・場所：青葉ビル（岩手県釜石市）他
・宿泊：８月６日　一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校
・内容：釜石の高校生の思いを受け、釜石を盛り上げるためのプロジェクトを立ち上げるための現地調査と企画会議。２日間の話し合いを受け、「甲子地域のコミュニティ構築」「震災伝承（こども向け＆外国人向け）」を目的とした企画が出来上がった。
・参加人数：学生３名、岩手県立釜石高校生徒３名、教職員１名

ⅱ）計画したプロジェクト実現のための準備
①　「埼玉（大学）×釜石でのネットテレビ会議」
・日程：2019 年９月～2020 年３月のあいだ月１回ペースで実施
・内容：８月の合宿で企画した内容についての実現に向けた話し合い、各プロジェクトの進捗共有とともに実現に向けた打ち合わせを行った。

ⅲ）実施したプロジェクト
①　震災伝承（外国人向け）の実施
ラグビーワールドカップ 2019 が釜石市鵜住居地区で開かれることに合わせ、当日来場する世界中の人々に、東日本大震災で起きたことと災害に備える事の大切さを知っていた

だくために、配布用の団扇を作成し、配布を行った。

・日程：９月 25 日（水）震災伝承の団扇の配布を釜石鵜住居復興スタジアム周辺で実施

・場所：三陸鉄道鵜住居駅から釜石鵜住居復興スタジアム周辺

・内容：企画メンバーで団扇に掲載する内容・レイアウトを行い、配布当日は企画した高校生だけでなく、地元釜石高校の生徒、一緒に企画に関わった大学生等が参加し、世界中から訪れた観戦客に 2,000 枚以上の団扇を配布した。なお、当初はもう一試合（10 月 13 日）についても配布に向けて準備をしていたが、台風 19 号被害に伴い試合が中止となったため、11 月 23 日（土）に別の試合の際に配布を行った。

・参加人数：学生 １ 名、岩手県立釜石高校生徒 ３ 名他

・備考：ラグビーワールドカップという国際大会で唯一の被災地開催という注目度もあり、当日の活動は多くのメディアに取り上げられた。具体的には、NHK、テレビ岩手、岩手日報、復興釜石新聞からの取材があり報道された。

② 震災伝承（子ども向け）の実施

当初は市内の小学生向けの防災講座を計画していたが、最終的に震災伝承を行っていく高校生の団体を立ち上げることとなった。岩手県立釜石高等学校内で、2020 年 １ 月 25 日ボランティア団体「夢団」を設立した。なお、本団体は釜石高校内の団体であるため、立ち上げに当たって大学生の直接の関りはなく、アドバイス等の間接的な関りとなった。

③ 甲子地域のコミュニティ構築にむけた地域の調査を実施

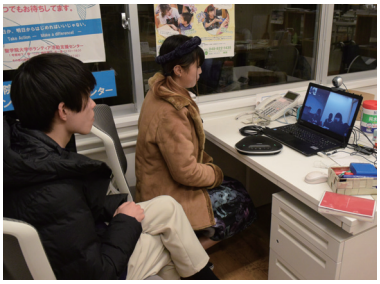
釜石市甲子地域は、市内でも内陸部にあり地域コミュニティのつながりが強い。しかし、震災以降沿岸部や他の地域からの転入者が増えており、それらの新規の住民と従来からの住民とのつながりが形成されにくい状況がある。同地区の住民でもある企画者の高校生が、新しく転入してきた住民ともつながりあえるような取り組みをしたいとの思いから、まずは住民の意識調査を実施することとなった。

・日程：11 月 23 日（土）　アンケートの実施・回収

・場所：釜石市甲子地域の住民

・内容：新旧住民にそれぞれ地域コミュニティとの関りの程度と今後の関り方への希望について、アンケート調査を実施した。

・参加人数：学生 １ 名、岩手県立釜石高校生徒 １ 名、現地スタッフ １ 名



(4)「釜石フェスティバル」の実施

2014 年 1 月 29 日に締結した、聖学院大学と釜石市の連携協定に基づき、埼玉県内において釜石の魅力発信の機会とすると共に、聖学院大学の復興支援活動や釜石との関わりを通してできた繋がりや学びについて、学内外の方々に知っていただく機会として当フェスティバルを実施した。2015 年に初めて実施して以降 2 回目の開催となった。

ⅰ)実施概要

実施日：2019 年 11 月 1 日（金）、2 日（土）10:00～15:00
主　催：チーム釜フェス実行委員会／ボランティア活動支援センター
共　催：釜石市
実施場所：チャペル（講演会）・2 号館前スペース（模擬店）・2303 教室（活動展示）
来場者数：2 日（月）・・・展示 24 名／釜石ラーメン 100 食販売
　　3 日（火）・・・講演会　約 120 名／展示(ミニトーク参加者含む)　50 名
　　釜石ラーメン 150 食販売
実行委員：学生 22 名
運営ボランティア：卒業生 12 名

ⅱ)実施内容

① 展示
釜石ビフォア＆アフター、キッズかけっこ教室、荒川区傾聴ボランティアグループダンボの会報告、原木椎茸体験コーナー、釜石マップ、釜石クイズ、復興支援ボランティアチーム【SAVE】、釜石学、釜石マニアックツアー報告、卒業生作成写真集、自由の森学園高等学校、釜石市役所（観光ポスター・ラグビー関連グッズ等）
② 模擬店・物産販売
模擬店：釜石ラーメン（しょうゆ味、ラガー味）
物産販売：釜石の特産品（釜石ラーメン他）、釜石周辺の福祉施設授産品販売（クッキー他）
③ 釜石ミニトーク「釜石の魅力」
日　時：11 月 2 日（土）11:00～12:00
会　場：2303 教室
ゲスト：伊藤聡氏（一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校代表理事）
　　山﨑可奈子（釜石市総合政策課）
　　由木加奈子（釜援隊・本学卒業生）
進行：山下佑介・森悠希（チーム釜フェスメンバー）
④ 講演会
共　催：釜石市、聖学院大学政治経済学部

日　時：11 月２日（土）14:00～15:30
会　場：チャペル
講　演：「生き続けるということ～宝来館女将が語る 釜石のあの日・今・未来～」
　　岩﨑昭子氏（浜辺の料理宿「宝来館」女将）
パネルディスカッション：
・登壇者：岩崎昭子氏（浜辺の料理宿「宝来館」女将）
　　富永湧介（チーム釜フェス代表、復興支援ボランティアチーム【SAVE】）
　　楢原郁奈（児童学科４年、復興支援ボランティアチーム【SAVE】）
・コーディネーター　永松実梨（ボランティア活動支援センター、元チーム釜フェス代表）
※講演会の詳細に関しては６ページ参照

ⅲ）報告とお礼のための釜石市訪問

実行委員の学生が直接フェスティバルの報告と寄付金の贈呈（イベント内での募金:21,680 円と釜石ラーメンと物販の売り上げ金 56,940 円）のため釜石市を訪問した。当日は釜石市長が対応してくださり、学生から直接市長に活動の報告とお礼をお伝えすることができた。

日　程：2019 年 11 月 29 日（金）～11 月 30 日（土）
訪問先：釜石市市役所（共催）、宝来館岩﨑女将（講演者）、
　　シープラザ釜石下川原店長（物産店協力先）・釜援隊
訪問者：学生２名、職員１名

(5)「東日本大震災復旧・復興支援活動フォーラム」における感謝状贈呈について

釜石市における東日本大震災に伴う復旧・復興支援活動を行なった団体に対し、感謝の意を表する「東日本大震災復旧・復興支援活動フォーラム」が７月５日（金）に行われ、教

育機関を代表し「学校法人聖学院・聖学院大学」として清水正之理事長・学長が釜石市長より直接感謝状を受け取った。

理由として 2011 年から続いている復興支援活動について、協定を結んでいる聖学院大学を始め、聖学院中高・女子聖学院中高と法人全体で継続していることへの感謝として贈られた。

(6)「釜石での出会いからはじまった」の発行

2011 年の秋以降からこれまで継続している釜石との関わりについて、これまで釜石と関わってきた教職員、卒業生、在校生に執筆いただき、冊子を発行した。

発行日：2019 年 3 月
発行部数：1,000 部
内　容：・釜石の人々との出会い
・想い・元気を届ける
・交流
・貴重な体験・活動
・調べ、学ぶ
・味合う
・資料集

(7)「東日本大震災を覚えて～礼拝と集い～」の実施

震災から 9 年となる 2020 年 3 月 11 日に、東日本大震災で亡くなった方、また現在も復興に向けて努力されている皆様を覚え、祈りの時とこれからを共にどう歩んでいくかを考える機会を持つ場をキリスト教センターとの共催で計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、有志での開催となった。

(8)台風 19 号被害に対する対応について

2019 年 10 月に日本列島に接近・上陸した台風 19 号で被害が大きかった、埼玉県上尾市・東松山市・川越市、福島県いわき市にて学生と教職員が復興支援活動に関わった。

ｉ)埼玉県上尾市での復興支援活動

上尾市社会福祉協議会を通じて活動を行った。
日　程：2019 年 10 月 30 日（水）
参加者：職員 1 名
活動内容：上尾市平方地区にある個人宅の泥出し作業
※11 月以降も活動実施を予定していたが、上尾市社会福祉協議会がボランティアの受け入

れを終了したため、１回の活動を持って終了となった。

ⅱ)埼玉県東松山での復興支援活動

NPO 法人チーム東松山を通じて活動を行った。
日　程：2019 年 11 月 10 日（日）
参加者：学生７名、職員１名
活動内容：東松山市葛袋地区にある個人宅の清掃等

ⅲ)埼玉県川越市での復興支援活動

総務課との連携のもと、浸水被害のあった社会福祉法人キングス・ガーデン埼玉特別養護老人ホーム川越キングス・ガーデンへ学内にある備品の寄付を行った。
日　程：2019 年 11 月 25 日（月）
参加者：学生６名、職員３名
活動内容：学内備品（介護用ベッド等）の寄付

ⅳ)福島県いわき市での復興支援活動

日本財団学生ボランティアセンター（2017 年 12 月に学生ボランティア活動推進に関する協定書を締結）と立正大学社会福祉学部ボランティア活動推進センターと連携し、「チームながぐつプロジェクト令和元年台風 19 号福島」としてボランティアツアーを実施した。
日　程：2020 年２月 13 日（木）～15 日（土）
参加者：学生６名、教員１名、職員１名
活動内容：いわき市下平窪地区の田んぼや用水路の復旧作業

(10)関連機関との連携

ⅰ)聖学院中学高等学校高校生徒会主催「3.11　いま僕たちにできること」への協力

高大連携の一環として、聖学院中学高等学校の中高生徒会より、東日本大震災を覚える時間を持ちたいという相談を受け、2020 年３月 10 日（火）開催にむけて、企画や運営方法について支援を行っていたが、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、中止となった。

ⅱ)「東日本大震災を風化させないプロジェクト」の実施

2015 年３月 11 日に聖学院中学高等学校生徒会企画の「2015.3.11　いま僕たちにできること」への運営協力がきっかけとなり、学生が次世代(高校生)に東日本大震災を語り

継ぐプロジェクトを実施している。

日にち	場所	実施内容	実施体制
2019 年 ９月３日（火）	聖学院小学校	ボランティア実践論受講生企画による小学 5 年生を対象とした防災授業	学生６名 同行：教員１名 職員２名
2020 年 ２月３日（月）	聖学院大学	クラーク記念国際高等学校保育・福祉専攻の生徒を対象に岩手県釜石市での取り組みを紹介	学生２名 職員１名
日にち	場所	実施内容	実施体制
２月 26 日（水）	聖学院中学校	東日本大震災復興支援活動や防災活動経験者、被災経験者よる中学 1 年生を対象とした防災授業	学生７名 職員２名

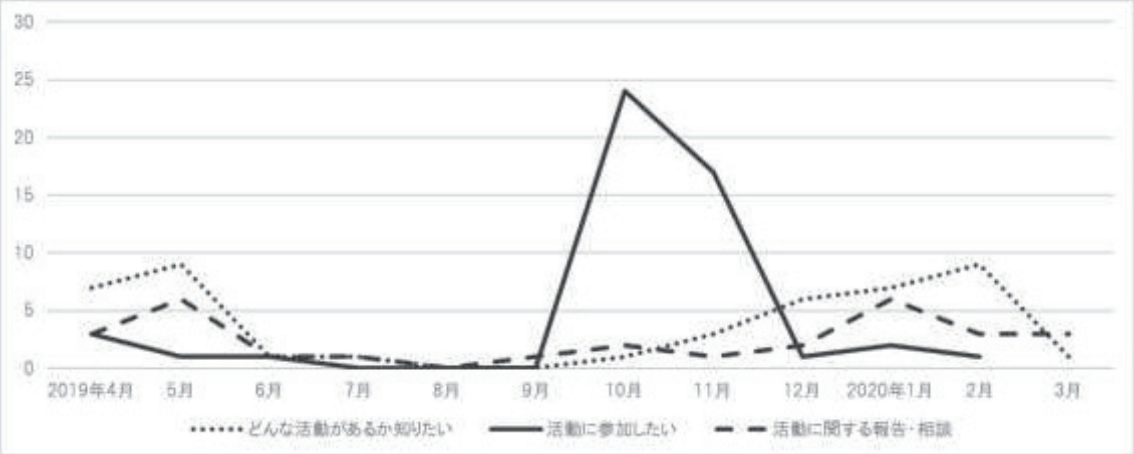
4. 学外のボランティア活動の紹介とその活動の支援に関する事業

(1)ボランティアコーディネート業務

大学１号館地下１階“地域共生広場 1cafe”の相談窓口にて、平日 12:10～16:00 はボランティアを希望する学生の相談や、学生ボランティアを募集したい近隣諸団体のボランティア担当者から相談などを受けた。ボランティア活動への一歩が中々踏み出せない学生の後押しや、ボランティア活動への参加を希望する学生と活動先のマッチング、活動のステップアップのフォローなど、多岐にわたる相談に応じてきた。

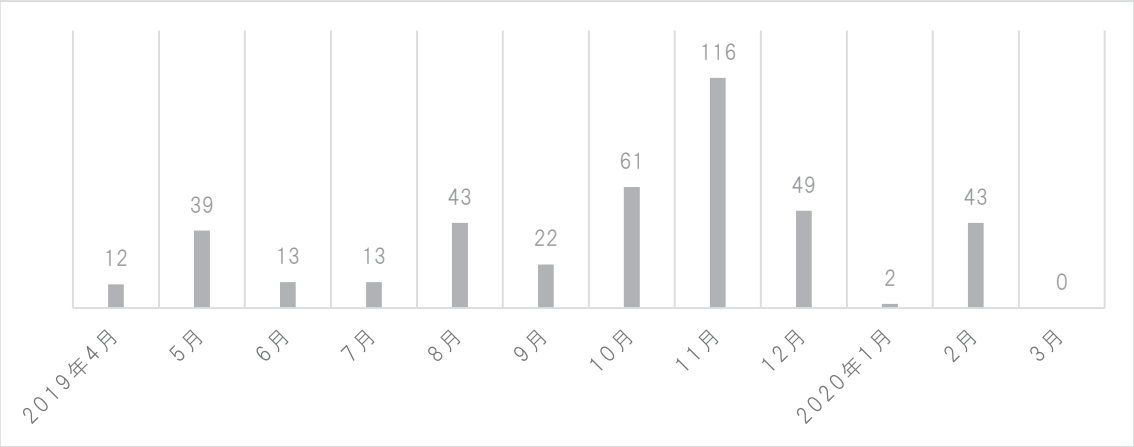
ⅰ)個人ボランティア相談件数と相談内容

相談件数　124 件内訳



ⅱ)新規ボランティアマッチング件数と活動内容

①　月別マッチング者数　　のべマッチング件数 413 件内訳



② 主なマッチング先

月	マッチング先
2019年４月	センター主催：復興支援ボランティアスタディツアー「桜プロジェクト８」 県内：国立病院機構東埼玉病院、社会福祉法人美鈴会パストーン浅間台 社会福祉法人いーはとーぶ、 ドナルド・マクドナルド・ハウス さいたま 県外：NPO法人iPledge
５月	県内：埼玉県防災学習センター、国立病院機構東埼玉病院、 埼玉県立大宮北特別支援学校、アートフルゆめまつり、 ドナルド・マクドナルド・ハウス さいたま わこう・あそびの森、第21回上尾市障がい者作品まつり
６月	県内：2019日本ID陸上競技選手権大会、 ドナルド・マクドナルド・ハウス さいたま、尾山台団地健康カフェ 県外：荒川区社会福祉協議会
７月	県内：ヤングボランティアグループ・コスモス 県外：社会福祉法人福光会子どもの園
８月	センター主催：復興支援ボランティアスタディツアー「よいさっ！プロジェクト６」、 釜石「キッズかけっこ教室」 県内：彩の国きずなウォーク、蕨市福祉・児童センター、日進公民館 児童養護施設若竹ホーム 県外：仙台市若林区笹屋敷町内会、一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校
９月	県内：川口フェス2019、埼玉県防災学習センター、 ReVA復興ボランティアチーム・上尾
10月	大学主催：しらこばと団地ハロウィンイベント 県内：さいたまKI-TAまつり2019、コミ協フェスタin大谷2019 尾山台・原市・瓦葺多文化交流フェア2019、
11月	センター主催：ボラフェス2019、釜石フェスティバル 台風１９号被害災害復旧ボラ（東松山市、川越市） 県内：上尾市消費者啓発活動、社会福祉法人美鈴会パストーン浅間台、 第46回あげお産業祭、埼玉県精神障がい者フットサルリーグ、 埼玉県福祉部福祉政策課、第37回上尾消費生活展、てらこや新都心、 NPO法人チャリティーサンタ、日進公民館
12月	センター主催：復興支援ボランティアスタディツアー「サンタプロジェクト９」 大学主催：しらこばと団地クリスマス会 県内：尾山台団地「みんなの防災カフェ」、日進公民館 「よしかわ発見！！かるた」実行委員会、プラザまつりin大宮

	てらこや新都心、宮原青年クラブ、NPO 法人チャリティーサンタ、 生活介護とさき、大宮こども部、埼玉県ユニセフ協会、 NPO 法人ワーカーズコープ和光地域福祉事業所
2020 年 1 月	県内：社会福祉法人美鈴会パストーン浅間台、大宮こども部
2 月	センター共催：チームながぐつプロジェクト令和元年台風 19 号福島 県内：社会福祉法人いーはとーぶ、埼玉県立日高特別支学校、 社会福祉法人美鈴会パストーン浅間台
3 月	新型コロナウイルス感染症拡大を受けてマッチング休止

ご対応してくださった団体の皆様、大変お世話になりました。

(2)「ボラフェス！2019」の実施

本学の学園祭「ヴェリタス祭」にて、近隣や卒業生が働く福祉施設をお招きして手作り商品の販売や、ボランティア募集をしていただくなど、福祉施設と学生・教職員、地域の方々との接点をつくる機会として実行委員会形式でイベントを実施している。

ⅰ)実施概要

実施日：2019 年 11 月 1 日（金）、2 日（土）10:00～15:00
実施場所：聖学院大学エルピス食堂と食堂前の芝生エリア
来場者数：1 日（金）223 人　、2 日（土）756 人　※出展団体含む　のべ 979 人
学生実行委員：3 名
当日ボランティア：6 名

ⅱ)実施内容

①　福祉施設等の活動紹介と商品販売

聖学院卒業生の就職先や、普段学生達がボランティアでお世話になっている福祉施設を中心にお招きし、活動紹介、ボランティア募集、商品の販売などを行った。

―11 月 1 日（金）出店団体

- NPO 法人リトルポケットあとりえふぁんとむ
- 社会福祉法人あらぐさ福祉会労働と教育の場「雑草」
- 認定 NPO 法人彩の子ネットワーク
- 医療法人大壮会地域活動支援センターベルベッキオ
- 社会福祉法人あげお福祉会　多機能型事業所プラスハート
- 生活介護とさき
- マゴソスクールを支える会
- empower（欧米文化学科サベットゼミ）

―11 月２日（土）出店団体

・医療法人大壮会地域活動支援センターベルベッキオ
・社会福祉法人一麦福祉会　ワークスみぎわ
・NPO 法人みのり
・社会福祉法人皆の郷第２川越いもの子作業所
・ＮＰＯ法人みやはら福祉会ひびき
・生活介護施設とさき
・empower（欧米文化学科サベットゼミ）
・マゴソスクールを支える会

②こども遊びコーナー

防犯パトロールチームＳＴＯＰ！が Heart&Smile の有志メンバーの協力を得て、「防犯キーホルダー」づくりのコーナーや「巨大お絵かきコーナー」を実施した。

③ボラフェス実行委員とボランティアアソシエーション・グレイスによる焼きそば販売

今年度新たな試みとして、福祉施設とのさらなる連携と、地産地消を意識して、地元の福祉施設「生活介護とさき」で障害のある方が地域の方とともにつくられている野菜を使った焼きそば販売を行った。

ⅲ）参加団体の声（一部抜粋）

・学生さんたちが頑張って取り組んでいる様子が感じられて、嬉しく、気持ちよく参加しました。活動紹介と、赤ちゃんの重さのクイズをしたのですが、時々立ち止まってくださる方もいて交流できました。
・私たちの普段の活動ではお会いすることが少ない学生の皆様に事業所のことを伝えられる貴重な機会になりました。

ⅳ）成果と課題

・初めての取り組みとなった、福祉施設の授産製品とのコラボによる企画（生活介護とさきの野菜を使ったやきそば販売）は、ボラフェスのみならず、福祉施設とのコラボの可能性を広げるきっかけとなった。学生サポートメンバーが主催したボラ年会においても生活介護とさきでつくられた野菜をつかった鍋の夕食会が持たれた。
・今年度は、すべての実行委員が焼きそば販売を担当したことと、当日ボランティアの学生も例年に比べて少なかったこともあり、福祉施設の出店協力を十分に行うことができなかった。ボラフェス当日のみならず、各施設でのボランティア活動の紹介を積極的に行い、日頃の活動から出店の手伝いに一人でも多くの学生をつなげていきたい。

(3)地域イベントへの参画

上尾市やさいたま市等で行われるイベントについては、企画段階から関わることが増えてきている。学生も担い手の一人としての自覚を持ち参加することで、学生と地域との顔の見える関係が育まれつつある。

ｉ)地域イベントへの参加実績と参加内容

日にち	依頼元／イベント名	参加内容	参加人数
2019年5月5日	埼玉県防災学習センター	「防災戦隊マモルンジャー」の学生がヒーローショーを実施	7名
8月9日	さいたま市日進公民館	小学生向けの教養講座「キッズサマーカーニバル」のなかでダンス同好会CRUSH有志がヒップホップ体験プログラムを企画・運営	5名
9月16日	埼玉県防災学習センター	「防災戦隊マモルンジャー」の学生がヒーローショーを実施	8名
10月22日	さいたま北商工共同組合／さいたま KI-TA まつり2019	会場設営・運営	27名
10月27日	尾山台・原市・瓦葺多文化交流フェア2019	STEP.の学生が実行委員として防災コーナーの企画に参加、「防災戦隊マモルンジャー」の学生がヒーローショーを実施	11名
11月9日、10日	上尾市商工課／第46回あげお産業祭	こどもあそびコーナーの企画・運営、アカペラ部によるステージパフォーマンス	28名
11月23日 24日	上尾市消費生活センター／第37回上尾消費生活展	レンジャー・着ぐるみでの会場内企画PR、かえっこバザール担当	16名
2020年 2月17日	埼玉県立日高特別支援学校／小学校低学年対象防災授業	「防災戦隊マモルンジャー」ヒーローショーと交流企画	8名

(4)行政、市民活動団体との連携事業

つながりのある行政や市民活動団体等と連携事業を行った。

ｉ）上尾市社会福祉協議会主催「夏休みボランティア体験 2019」への協力について

上尾市社会福祉協議会が毎年夏に実施しているボランティア体験プログラムの事前学習会において、ボランティア活動経験のある本学学生が体験談やボランティア活動の魅力について紹介を行った。また、防犯ボランティアチーム STOP!が受け入れ団体として参加した。

①事前学習会

実施日：2019 年 7 月 23 日（火）、24 日(水)、26 日（金）、28 日（日）、31 日（水）
各日 10:00～11:30

場　所：上尾市コミュニティセンター

対象者：「夏休みボランティア体験 2019」参加希望者
（上尾市在住・在勤、在学の小学 4 年生～社会人）

参加者：学生計 4 名、「夏休みボランティア体験 2019」参加希望者計 123 名

内　容：・上尾市社会福祉協議会職員による事務連絡やボランティア活動中のマナーなど
・学生によるボランティア活動紹介（ボランティア活動を始めたきっかけ、どんな活動をしているか、ボランティア活動中のエピソードなど）

②ボランティア体験の受け入れ

防犯ボランティアチーム STOP！が大学周辺のパトロール体験プログラムを準備していたが、受け入れ当日が悪天候の予報が出たため、受け入れ中止となった。

(5)学外団体からの相談対応

今年度は、新規での問い合わせも増え、学生たちの新たな活動がはじまる可能性にあふれた 1 年となった。

ｉ)学外団体相談対応件数　　59 件内訳

月	来訪	TEL	MAIL	その他
2019 年 4 月	2	1	2	—
5月	—	1	—	—
6 月	3	2	1	—
7 月	5	1	2	—
8 月	1	2	1	—
9 月	2	3	—	—
10 月	2	5	1	—
11 月	1	3	—	—

月	来訪	ＴＥＬ	ＭＡＩＬ	その他
12 月	5	1	―	―
2020 年 1 月	2	1	1	―
2 月	1	1	―	2
3 月	2	2	―	―
合計	*26*	*23*	*8*	*2*

(6)コーディネーターのスーパーバイズ

センター発足時から、コーディネーターの日々のボランティアコーディネーションについて、毎週１回（15～60 分程度）スーパービジョンを実施している。困難な調整事例や課題のある学生への対応方法など、コーディネーターが一人で抱え込まない環境づくりができた。また、複数で課題を検討することで、様々なアイデアが生まれ、よりよい支援や活動につなげることができた。

■スーパーバイズ：毎週 1 回 15～60 分

5. ボランティア活動の記録と広報に関する事業

(1)ボランティア情報の発信(メルマガ・LINE@・ホームページ・facebook・掲示板)

ⅰ)ボランティア掲示板でのボランティア情報の紹介

大学１号館地下１階“地域共生広場 1cafe”に相談窓口とあわせて設置している「ボランティア掲示板」にて、学内外のボランティア情報のポスターを掲示し、学生への周知を行った。

ⅱ)メールマガジン・LINE@の配信

センターでは、配信希望者に月１～３回程度、不定期で「おすすめボランティア情報」をメールマガジンと LINE@で配信している。

・メールマガジン登録者数　297 名(2020 年３月現在)

・LINE@配信者数　164 名（2020 年３月現在）

・メールマガジン・LINE@配信実績

月	配信回数	月	配信回数
2019 年4月	4	10 月	3
5月	1	11 月	3
6月	2	12 月	1
7月	2	2020 年1月	2
8月	2	2 月	―
9月	―	3月	1
		合計	21

(2)ボランティア活動支援センター広報活動

ⅰ)WEB 上での情報発信

センターの取り組みを外部へ発信することを目的として、ホームページを設置している。日々の活動については、Facebook ページで紹介している。

・facebook ページ　フォロワー数：420 人（2020 年３月 31 日現在）

ⅱ)センター広報ツールの更新

センターの存在を学内外に周知することと、学生のボランティア活動を学内外で紹介することを目的に、ポスター等の広報ツールを作成している。

※製作物は資料編 81 ページに掲載

ⅲ)オープンキャンパスへの参加

高校生へ、大学生たちの活躍の様子を直接見てもらうことと、ボランティア活動支援センターの存在を知ってもらうため、オープンキャンパスでセンターの紹介を行った。

内　容：・ボランティア活動支援センターの紹介
　　・学生ボランティア団体の活動紹介模造紙の展示・説明

対　応：ボランティア活動支援センタースタッフ

場　所：1103 教室（地域連携・ボランティア支援課事務室）

参加日程：８月 16 日（金）

6. その他の事業

(1) 視察・研修記録

ⅰ)研修・勉強会参加実績

日にち	研修先・勉強会名等	参加人数
2019年 4月7日（日） 7月27日（土） 10月14日（月）	サービスラーニング研究会「若者プログラム開発」主催：若者の福祉教育研究会 会場：鶴ヶ島市市民活動推進センター、 筑波大学付属坂戸高等学校、ウエスタ川越	アドバイザー1名
6月13日（木）	ボランティアコーディネーター基礎研修 主催：日本ボランティアコーディネーター協会 会場：東京ボランティア・市民活動センター	コーディネーター1名
9月11日（水） 12日（木）	第13回大学ボランティアセンター全国フォーラム 主催：NPO法人ユースビジョン 会場：首都大学東京	コーディネーター3名
10月8日（火）	第1回埼玉市民活動サポートセンターネットワーク研修会 主催：公益財団法人いきいき埼玉 会場：埼玉県県民活動総合センター	コーディネーター1名
2020年 2月22日（土） 23日（日）	全国ボランティアコーディネーター研究集会 主催：全国ボランティアコーディネーター研究集会 2020東京実行委員会、認定NPO法人 日本ボランティアコーディネーター協会	コーディネーター1名

(2)視察対応・活動発表・講師対応・外部委員

ⅰ)視察対応

日にち	来訪団体名	来訪人数
2019年 11月14日（木）	城西大学	教員1名 職員1名

ⅱ)活動発表・講師対応

日にち	活動発表先
2019年 4月24日（水）	北本市社会福祉協議会ボランティア講座 内容：ボランティア入門講座「私にあった活動探し」 講師：川田虎男

日にち	活動発表先
4月25日（木）	埼玉県立誠和福祉高等学校 内容：福祉の仕事と大学での学び 講師：川田虎男
6月6日（木）	NewEducationEXPO2019 主催：NEW EDUCATION EXPO 実行委員会 内容：学生の成長をいかに促進するか～職員と学生が創るラーニング・コモンズ、 キャンパスコンシェルジュ等の具体例～ 発表者：川田虎男、芦澤弘子
8月25日（日） 9月22日（日） 12月22日（日）	「学生と学び合う、ファシリテーション講座」 主催：彩魂 ～埼玉×NPO×ワカテネットワーク 内容：高校生・大学生向けファシリテーション講座 講師：川田虎男
2020年 1月27日（月）	クラーク記念国際高等学校 内容：ボランティア活動について 発表者：川田虎男
2月3日（月）	クラーク記念国際高等学校 内容：学生による活動紹介 発表者：川田虎男、学生２名

iii）外部委員

氏名	所属委員会
川田虎男	・埼玉県社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター運営委員 ・上尾市社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員委員長 ・草加市自治基本条例検証委員会委員 ・全国ボランティアコーディネーター研究集会 2020 東京実行委員（事務局：認定 NPO 法人日本ボランティアコーディネーター協会） ・大学でのボランティア推進に関する調査ワーキングチームメンバー（事務局：東京ボランティア・市民活動センター）
芦澤弘子	・NPO インターンシップラボ実行委員 ・市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2020 準備会委員（事務局：東京ボランティア・市民活動センター） ・市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2020 実行委員 ・大学ボランティアセンター連絡会準備会委員（事務局：東京ボランティア・市民活動センター）

（3）学内他部署との連携

ｉ）総務課と連携した埼玉県立上尾橘高校就労体験の受け入れについて

埼玉県立上尾橘高校就労体験を本学として受け入れ、11 月７日（木）～12 日（火）の４日間、高校１年生の生徒１名が学内業務を体験した。その中の１日について、当センターで受け入れを行った。

・受け入れ日程：2019 年 11 月 12 日（火）

・受け入れ内容：ボランティア活動に取り組む学生への取材活動と記事作成

（4）法人内での連携

ｉ）聖学院中学高等学校中１総合学習 L.L.T.「Learn Live Together」への協力について

聖学院中学高等学校の依頼を受けて、中学１年生３学期の総合学習 L.L.T において、日頃ボランティア活動に取り組む学生が活動を通して学んだことや感じたことなどを伝え、生徒のボランティア活動への興味関心を引き出す授業を行った。また協力にあたっては、授業に協力する学生の伝える力とファシリテーション力を高める研修会を実施した。

①研修会

日　時：2020 年２月５日（水）13:00～15:30

会　場：1cafe

参加者：学生８名、聖学院中学高等学校教員１名

内　容：・趣旨やねらいの共有と協力内容の確認

・ワーク①話す練習

・ワーク②生徒に投げかける質問を考える

・ワーク③質問を使って会話を進行してみる

②1 回目授業

日　時：2020 年２月 12 日（水）10:50～11:40

会　場：聖学院中学高等学校　中学１年生の各教室

協力学生：ボランティア活動経験のある学生 16 名

内　容：学生が各教室（5 クラス）の各グループに分かれて生徒の輪に加わり（学生１人に対して生徒 6～10 人程度）授業がスタート。学生自らのボランティア活動の経験とまちとの関わりを語り、その後学生の進行で生徒と意見交換を行った。

③2 回目授業

日　時：2020 年２月 26 日（水）10:50～11:40

会　場：聖学院中学高等学校フューチャーセンター

協力学生：復興支援や防災活動経験のある学生７名

内　容：東日本大震災で被災経験のある学生や復興支援活動に取り組む学生が体験談やそのときに考えたことやその後の行動について紹介。学生たちの話をもとに、グループに分かれて、①台風 19 号の時に身の安全を守るためにどのような対応をした

か、②これからの災害（地震・台風等）に備えるためにどのようなことに取り組んだらよいか、③自分たちだけでなく、地域に住んでいる人みんなが助かるためにはどうしたらよいか、この 3 つをテーマに学生のフォローのもと、意見交換を行った。

（5）他大学との連携

ｉ）大学ボランティアセンターコーディネーター研究会

本研究会は、関東圏の大学ボランティアセンターの教職員の研修と情報交換を目的に 2013 年度に発足し、年 1～2 回のペースで開催している。

①大学ボランティアセンターコーディネーター研究会　2019 年度　第一回学習会

日　時：2019 年 11 月 15 日（金）15:00～18:00

会　場：聖学院大学ボランティア活動支援センター

内　容：・聖学院大学ボランティア活動支援センター見学
・情報交換会
- 台風 15 号・19 号被害へのボランティア対応の状況について
- 東日本大震災復興支援への関わり状況と今後の展開について
- 東京オリンピック･パラリンピック競技大会におけるボランティア活動について
- ボランティアの単位認定について
- 他部署との連携について

参加校：・神田外語大学ボランティアセンター
・中央大学ボランティアセンター
・明治大学ボランティアセンター
・明星大学きらきらボランティアセンター
・十文字学園女子大学ボランティアセンター
・立正大学社会福祉学部ボランティア活動推進センター
・東京ボランティア・市民活動センター
・埼玉県社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター
・聖学院大学ボランティア活動支援センター

資料集

▶（１）聖学院大学ボランティア活動支援センター内規

聖学院大学ボランティア活動支援センター内規

（目的）
第1条　聖学院大学（以下「本学」という。）は、聖学院教育憲章内の「神を仰ぎ、人に仕う」、オンリーワン・フォー・アザーズ（他者のために生きる個人）、サーヴァント・リーダーシップなどの精神の具現化のため、キリスト教大学における教育活動の一環として推奨されるボランティア活動の普及に取り組み、本学における諸ボランティア活動を支援するために、聖学院大学ボランティア活動支援センター（以下「センター」という。）を設立する。

（組織）
第2条　センターの活動を円滑に展開するために、次の教職員を置く。
（1）センター所長　1名
（2）センター副所長　若干名
（3）ボランティアコーディネーター及びアドバイザー　若干名
（4）事務職員　若干名
（5）その他学長が大学教授会で指名した者
2　センターの運営は、第3項に規定する聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）によってなされ、センター所長が議長を務める。
3　運営委員会は以下の構成員から構成される。
（1）センター所長
（2）センター副所長
（3）チャプレン
（4）聖学院大学教授会代表（数名）
（5）聖学院大学学生代表（数名）
（6）大学事務局管理部長
（7）ボランティアコーディネーター
（8）アドバイザー
（9）センター職員
（10）聖学院大学学長、総局長は必要に応じ陪席できるものとする
（11）その他、センター所長が必要と認める者
4　第1項第1号に規定されるセンター所長は、学長が指名する。
5　第1項第2号に規定されるセンター副所長は、所長が若干名を指名する。

（事業）
第 3 条　センターは、第 1 条の目的を実現するために以下の事業を担当する。
（1）キリスト教に基づくボランティア精神の育成と普及に関する事業
（2）ボランティアの人材育成とその担保に関する事業
（3）学内の諸ボランティア活動の連絡、協力および支援に関する事業
（4）学外のボランティア情報の紹介とその活動の支援に関する事業
（5）ボランティア基金の育成と経済的支援に関する事業
（6）ボランティア活動の記録と広報に関する事業
（改廃手続）
第4条　この内規の改廃は、大学教授会の議を経て、学長が決定する。

附　則
この規程は、2013 年 4 月 1 日から施行する。

附　則
この内規の一部改正（規程形式及び運営委員会の構成員の変更）は、2018 年 12 月 17 日から施行する。

▶（２）ボランティア活動支援センター運営委員一覧（2019 年度）

センター所長	平　修久	副学長、政治経済学科教授
センター副所長	猪狩廣美	政治経済学科特任教授
運営委員	M. サベット	欧米文化学科教授
	松井慎一郎	日本文化学科教授
	柴﨑　裕	児童学科特任教授
	五十嵐成見	人間福祉学部／心理福祉学部チャプレン、助教
	金谷京子	こども心理学科／心理福祉学科特任教授
	春木　豊	基礎総合教育部特任講師
	西川　正	地域連携・教育センターアドバイザー
	滝野恵基	学生サポートメンバー、こども心理学科 4 年
	伊藤みさき	学生サポートメンバー、こども心理学科 3 年
	島村宣生	地域連携・ボランティア支援課長
	川田虎男	ボランティア活動支援センターアドバイザー
	芦澤弘子	ボランティアコーディネーター
	丸山阿子	ボランティアコーディネーター
	山田裕太	地域連携・ボランティア支援課

▶（３）ボランティア活動支援センター運営委員会協議事項

第 77 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2019 年 4 月 3 日（水）午後 2 時 00 分～2 時 50 分
・復興支援ボランティア交通費補助申請の件

第 78 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2019 年 5 月 8 日（水）午後 3 時 20 分～4 時 00 分
・復興支援ボランティア交通費補助申請の件

第 79 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2019 年 6 月 5 日（水）午後 3 時 20 分～4 時 20 分
・釜石フェスティバル実施の件

第 80 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2019 年 7 月 3 日（水）午後 3 時 20 分～4 時 20 分
・復興支援ボランティア交通費補助申請の件
・被災地インターンシップ履修申請の件

第 81 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2019 年 10 月 2 日（水）午後 3 時 20 分～4 時 00 分
・復興支援ボランティア交通費補助申請の件

第 82 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2019 年 11 月 6 日（水）午後 3 時 20 分～4 時 20 分
・復興支援ボランティア交通費補助規程変更の件
・復興支援ボランティア交通費補助申請の件

第 83 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2019 年 12 月 4 日（水）午後 3 時 20 分～4 時 20 分
・2020 年度ボランティア活動支援センター事業計画・予算の件
・復興支援ボランティア交通費補助申請の件

第 84 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年 1 月 8 日（水）午後 3 時 20 分～4 時 00 分
・2020 年度ボランティア活動支援センター事業計画・予算の件
・台風 19 号被害への支援（福島県いわき市）の実施について
・東日本大震災 9 年を覚えて～未来への祈り～実施の件

第 85 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年 2 月 5 日（水）【持ち回り開催】
協議事項なし

第 86 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年 3 月 4 日（水）【持ち回り開催】
協議事項なし

▶（４）メディア出演・掲載

■2019 年 4 月 27 日（土） 復興釜石新聞　1 面

「盆栽で鵜住居住民と交流 : 聖学院大生ボランティアツアー」
著作権により非表示

■2019 年 6 月 19 日（水）読売新聞朝刊　24 面（岩手）

「釜石復興　学生の活動記録 : 埼玉・聖学院大　今後の支援参考に」
著作権により非表示

■2019 年 8 月 17 日(土) 復興釜石新聞 3 面

「希望の地域づくりを考える : 聖学院大出張講義　住民から教わる「釜石学」」
著作権により非表示

■2019 年 9 月 7 日(土) 復興釜石新聞 4 面

「子どもらと「かけっこ」交流 : 聖学院大の陸上競技部員」
著作権により非表示

■三陸ブロードネット「ウィークリーダイジェスト」: 2019 年 9 月 4 日(水)放送
釜石「キッズかけっこ教室」の様子が放映された。

■2019 年 11 月 30 日(土) 岩手日報朝刊 27 面

「震災と台風19号の被災地支援に寄付 : 聖学院大が市へ」
著作権により非表示

■2019 年 12 月 4 日(水) 復興釜石新聞 3 面

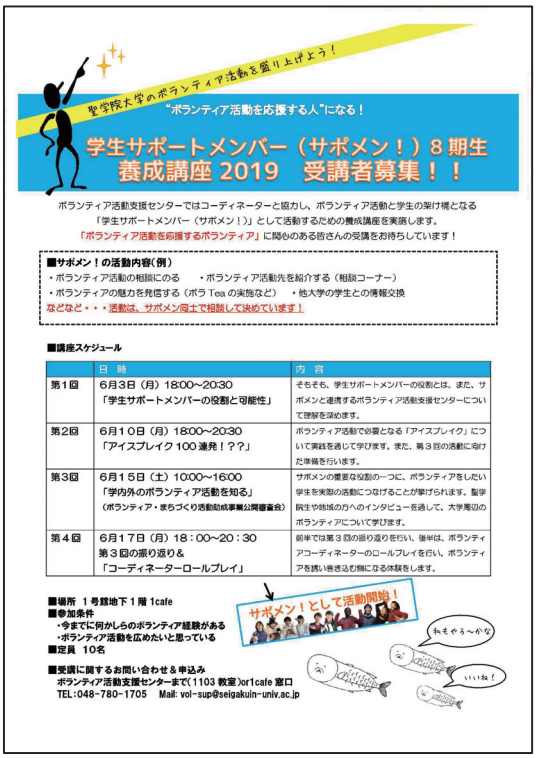
「鵜住居住民と料理づくりで交流 : 聖学院大　被災者支援の寄付も」
著作権により非表示

■テレビ埼玉「ニュース545」:2020 年 2 月 26 日(水)放送
聖学院中学校中学1年生の L.L.T.(Learn Live Together)の授業にて、復興支援活動に取り組む学生たちによる防災授業の様子が放映された。

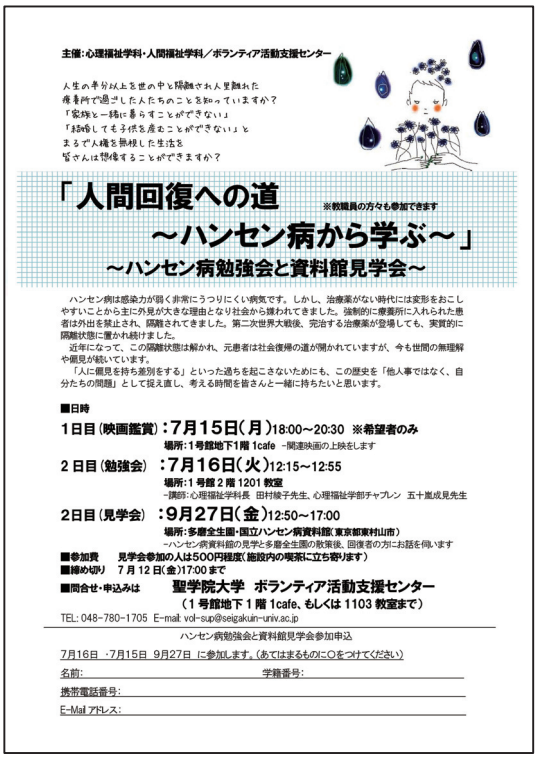
■テレビ埼玉「ニュース 930plus」:2020 年 3 月 6 日(金)放送
東日本大震災関連の特集として、復興支援や被災地からの学びを防災授業として小中学生に伝えている学生ボランティアが紹介された。当日は、学生 2 名が生出演し、これまでの活動映像も交え今後の被災地との関りについて語った。

▶(５)広報ポスター各種

■学生サポートメンバー養成講座



■「ハンセン病勉強会と資料館見学会」

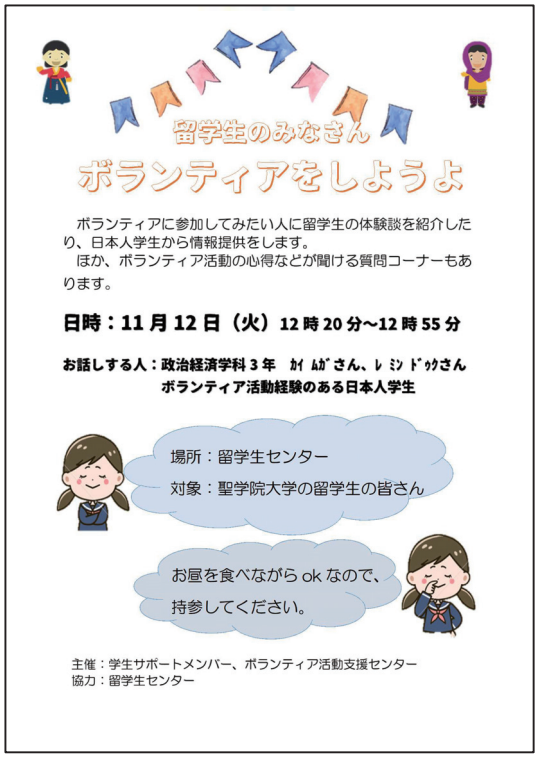


■学生ボランティア対象 SDGs 研修会

■新歓ボラ Tea（作成！サポメン！）

■七夕ボラ Tea（作成：サポメン！）

■ボランティアをしようよ
（作成：サポメン！）



■ボラ年会（作成：サポメン！）

■ボランティア・まちづくり活動助成事業
応募団体募集（チラシ表面）

■ボランティア・まちづくり活動助成事業
応募団体募集（ゼミ向け・チラシ裏面）

■ボランティア・まちづくり活動助成事業
応募団体募集（チラシ裏面）

2019 年度聖学院大学ボランティア・まちづくり助成金　募集要項

応募資格	地域へ貢献する意識をもった聖学院大学の学生 5 名以上の有志のグループ。 以下のみなさんは誰でも応募できます。 ① 学内外のボランティア団体 ② ゼミ・アドバイザーグループ ③ 学友会クラブ・同好会 ④ 各種委員会 ⑤ 有志の集まり ※商店街のシャッター街で絵を描く美術部のボランティア、障がい者にダンスを教える ダンス部等、新しいアイディアを待っています。
助成内容 ※総額 30万円	① 活動継続助成（運営費補助）　最大 3万円 ② 地域貢献活動助成　最大 5万円 ③ 被災地応援・復興支援助成　最大 5万円 ※ 公開審査会当日、ドネーションパーティによる若干の追加助成の可能性あり
助成対象経費	活動を行う上で必要な経費全般。ただし、自分たちの飲食代は除く。
応募期間	2019 年 5 月 21 日（火）～5 月 31 日（金）
助成対象期間	2019 年 5 月 1 日～2020 年 3 月末までの活動に対して助成
申請書・応募方法	① 説明会兼研修会にご参加ください。 5 月 13 日（月）18:00～20:00　会場：1cafe 5 月 15 日（水）18:00～20:00　会場：1cafe どちらかにご参加ください。申請書をお渡しし、事業企画書の書き方とプレゼンテーションの研修を行います。 ② 必要事項を記入し申請書を 5 月 31 日（金）までに、ボランティア活動支援センターにお持ちください。 ③ 6 月 15 日（土）13:30 からの公開審査会（会場：1号館1cafe を予定）にてプレゼンをお願いします。
選考方法 助成決定	6 月 15 日（土）13:30～の公開審査会で即日決定します。 申込み者は、3 分間のプレゼン発表+6 分間の質疑応答への対応をお願いします。助成金交付団体には、6 月 20 日（木）の昼休みに助成金の交付を行います。
報告書の提出と報告会への参加について	報告書は活動終了後 1 ヶ月以内の提出になります。（ただし、3 月の活動は 3 月末日）また、2020 年1月 10 日（金）に実施予定の活動報告会にて助成対象事業の報告をしてもらいます。
申込み・問合せ先	聖学院大学ボランティア活動支援センター（1 号館1 階　1103 室） 担当：数井・川田 TEL：048-780-1705　FAX：048-781-0094　Mail：vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp
共催団体	聖学院大学同窓会・社会福祉法人上尾市社会福祉協議会・ 聖学院大学ボランティア活動支援センター、地域連携教育センター

聖学院大学同窓会会長　坂村哲也さん（2001 年度政治経済学科卒業生）より
私たち同窓生にとって、学生のみなさんはかけがえのない後輩です。
多方面でご奉仕くださっていること、とても誇りに思います。
私たちもできる限りのお手伝いは致します。
皆様のこれからの活動が実りあるものになりますよう、心からお祈りします。

■ボランティア活動助成
ドネーションパーティーご案内（チラシ表面）

■ボランティア活動助成
ドネーションパーティーご案内（チラシ裏面）

ドネーションパーティとは？

地域活動（ボランティア）団体を民間の資金で支えるという、アメリカで始まった寄付システムの一つです。ボランティアや NPO が団体の願いや活動を報告し、その報告を聴いた人が、それぞれ共感した団体に寄付する取り組みです。

聖学院大学ボランティア学生応援 ドネーション（寄付）パーティ概要

《日 時》 6 月 15 日（土）13:30～17:30 （13:00 受付開始）

《趣 旨》 聖学院大学では、東日本大震災以降、復興支援活動や地域におけるボランティア活動が大変盛んになっています。大学としても「地域と歩む大学」として、研究・教育・活動を通し、地域との関わりを深めています。学生たちは、地域の皆さまとの関わりを通して、様々なことを学び、成長の機会とさせていただいています。 しかし、活動を頑張るあまり「ボランティア貧乏」に陥る学生や、経済的負担から活動を諦めざるを得ない学生もいます。そこで 2015 年度から、頑張る学生を応援するドネーション（寄付）パーティを開催しております。ぜひ、学生たちの想いのこもった発表を聴いてください。

《会 場》 聖学院大学 1 号館地下 1 階 1Cafe

大学スクールバス時刻表
■宮原駅西口発
12 時 10 30 50
13 時 10 30 55
■西大宮北口発
12 時 15
13 時 15 55
※乗車の際、運転手に「ボランティア活動支援センターのイベントに参加」とおっしゃっていただければ、無料でご乗車いただけます。

最寄駅からのアクセス
・JR 高崎線宮原駅から ……スクールバス約 5 分／徒歩 15 分
・JR 埼京線（川越線）西大宮駅から… …スクールバス約 10 分
・JR 埼京線（川越線）日進駅から… ……徒歩 15 分
※当日は公共交通機関を利用してお越しくださいますよう、お願いいたします。

《申し込み》 メール・お電話にてお受けします。当日飛び込み参加も大歓迎。
問合せ：聖学院大学ボランティア活動支援センター
TEL：048-780-1705　E-mail: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp

《当日の流れ》
13:00 受付開始。1 口 1,000 円のチケット交換（任意）
13:30 学生ボランティア団体によるプレゼンテーション（1 団体 3 分）
15:00 大学同窓会共催の活動助成事業公開審査、結果発表／ドネーションチケット投票
16:00 交流会（参加は任意ですが、ぜひご参加ください。参加費無料）
17:30 終 了
※時間は目安です。発表する団体数によって変動します。

《寄付方法》
1. お金による寄付
受付にて1口1, 000円のチケットと交換いただき、学生の発表終了後、応援したい団体にチケットを投票していただきます。
2. 現物による寄付
学生の発表終了後、応援したい団体に物品を直接寄贈していただきます。

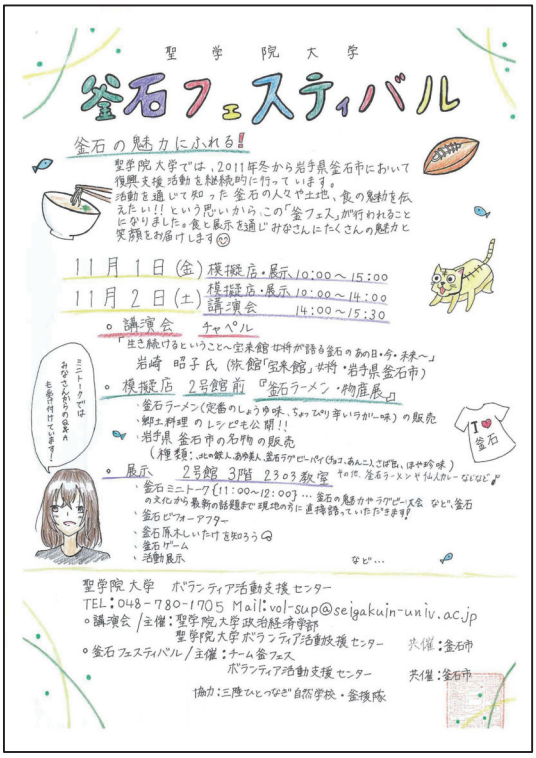
■復興支援ボランティアスタディツアー
「桜プロジェクト 8」盆栽講座案内

■復興支援ボランティアスタディツアー
「よいさっ！プロジェクト 6」

■「星に語りて」上映会

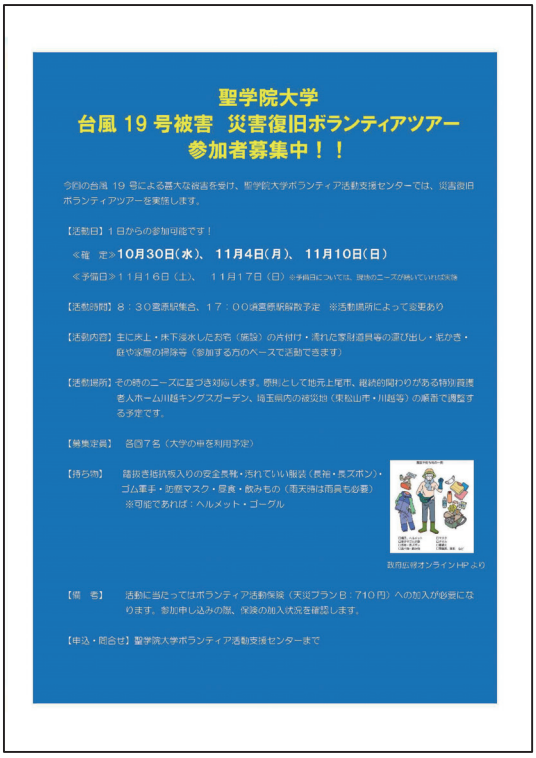
■復興支援ボランティアスタディツアー
「サンタプロジェクト 9」

■釜石フェスティバル
（チラシ裏面、作成：学生実行委員）



■釜石フェスティバル（チラシ裏面）

■台風 19 号災害復旧ボランティアツアー



■台風 19 号災害復旧ボランティアツアー

■アクションブック 2019

ボランティア活動支援センターを活用しよう！

どこに行けばいいの？

→1cafe(1 号館地下 1 階)のボラセン窓口へ Let’s go!!
開室時間：平日 12:10～16:00　※長期休みを除く
上記以外は 1103 教室にお越しください。

LINE@で最新のボランティア情報をゲットしよう！

LINE の『友達追加』から【QR コード】か【ID 検索】で登録してね

LINE@

ID: @elh2712d

こんな人も大歓迎!!

→すでに学外でボランティア活動をしている。聖学院生を誘いたい！
→自分の特技を生かしたい！（マジック、書道、茶道、将棋、楽器演奏など）
→ボラセンにご相談ください(*^_^*) ♪

「お金が無い！」あなたに朗報☆

→みなさんの先輩（卒業生）&地域の方々が活動資金の援助をしてくれます。
→復興支援ボランティア交通費補助があります。

ボラセンでは、皆さんの色んな想いを受け止めて、
実際の活動に繋いでいくお手伝いをしています。

1 号館で待ってます！

聖学院大学ボランティア活動支援センター

TEL:048-780-1705
E-Mail: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp
URL：http://seig-vc.jimdo.com/
Facebook: https://www.facebook.com/seig.vol

ボラセン　いいね！　ここから→

Action!

聖学院大学ボランティア活動支援センター
ボランティアガイドブック 2019

ボランティア　Volunteer ってなに？？

Volunteer の語源はラテン語の「VOLUNTAS」に
由来するといわれ、「自由な意思」、「自発的に申し出る」
という意味で訳されます。

例えば、
- 「音楽で一人でも多くの人を笑顔にしたい！」
- 「スポーツの楽しさを“もっと！”広めたい。障がいのある人でもスポーツを自由にできる世の中にしたい！！」
- 「被災地のために何か自分にできることはあるかな？」

…人から強制されるのではなく、
みなさんの“人や街を思う気持ち”“我慢できない想い”
からうまれる行動がボランティアです。

ボランティア活動に参加するきっかけは人それぞれ…

ボランティア関連の授業を受けたのがきっかけ！

先輩に誘われたのがきっかけ！

高校生のときから地元で活動してた！

他にも、高校の時から大学生になったら復興支援活動をすると決めていた、
家族の介護がきっかけでボランティアに参加しようと思った、就職活動する
なかで興味がわいた、など、きっかけは人それぞれ。
ボランティア活動支援センターではみなさんのあらゆる“きっかけ”を
応援します！

実際、聖学院生はどんなボランティア活動しているの？

防犯パトロール活動をやってるよ！

ケニアの子どもたちが安心して学校に通えるよう応援してるよ！

特別支援学校で防災のミニ授業をやったよ！

不登校・引きこもりの方々が社会復帰するためのプログラムに協力してるよ！

子どもたちとのあそびを通じた地域のつながりづくりを頑張っているよ！

長期休みには地元に帰って活動してるよ！

大型イベントのゴミゼロブースで活動したよ！

ボランティアに取り組む学生とネットワークをつくって活動してるよ！

東北の子どもたちの学習支援に関わっているよ！

地域のイベントでレンジャーに変身して盛り上げたよ！

Action!
ひろげてみよう！

みんなも自分に合った活動を見つけよう！

「やってみたい！」を見つけよう！

どんなことが好きですか？
どんなことに興味関心がありますか？
そんな問いから自分に合ったボランティアを見つけよう！

上尾市やさいたま市のイベントで「こどもあそび」企画を実施するようす

こどもたちの日常に寄り添う

こどもたちの“やってみたい！あそびたい！”や
勉強や生活面での“困った！”を応援する活動

活動先・内容
- 地域イベントでのこどもあそびの実施・サポート
- 子育て支援センター、児童館、児童デイサービス、児童養護施設
  フリースクールなどこどもたちの居場所でのあそび相手や生活支援　など

海外ボランティアで出会ったこどもたち　　ネパール地震被災者支援募金活動のようす

世界をつなぐ

世界の“困った！”を応援したり多文化理解を広げる活動

活動先・内容
- 海外ボランティアスタディツアーへの参加や
  国内での募金活動等を通じた国際協力
- 国際理解や多文化交流企画の実施やサポート　など

特別支援学校での防災授業のようす　　釜石ボランティアスタディツアー
被災地見学のようす

災害と向き合う

災害被災地での復興支援や防災・減災を学び、伝える活動

活動先・内容
- 東北地方をはじめとする災害被災地での復興支援活動
- 募金活動や現状を伝える活動の実施・サポート
- 防災・減災ための勉強会や情報交換会の実施、避難訓練等のサポート　など

「ボラフェス！inヴェリタス祭」のようす　　精神障がい者の方々との交流会の様子

障がいのある人もない人もともに

障がいのある人たちの日常や社会活動を応援したり
障がい者への理解を広げる活動

活動先・内容
- 障がい者スポーツ大会の運営サポート
- 障がい者福祉施設での生活サポートやイベント参加
- 福祉を学ぶイベントの企画・運営　　など

高齢者の“いきいき”を応援

高齢者の日常や社会活動の応援

活動先・内容
- 高齢者福祉施設での生活サポートやイベント参加
- お楽しみ会でのマジックや演奏等の披露
- 介護予防事業のサポート　など

大学目の前の三貫清水保全活動ようす　　学内での「ほたる祭り」実施のようす

大切な自然を未来に残す

自然環境を残すための整備をしたり
環境保護や保全を伝える活動

活動先・内容
- 森の整備や河川・海辺のゴミ拾いへの参加
- まちのクリーンアップ作戦への参加
- 環境保護や保全を伝えるイベントの実施やサポート　　など

「さいたまKI-TAまつり」出店のようす　　防犯パトロールのようす

まちを“もっと！”盛り上げる

みんなが安心して過ごせるまちづくりやまちの魅力を発信する活動

活動先・内容
- 防犯パトロール
- まちの魅力発信事業やイベントのサポート
- スポーツ大会のサポート　　など

■「ボラフェス 2019」開催案内

聖学院大学　ボランティア活動支援センター
2019 年度事業報告書
2020 年 12 月発行

発行
聖学院大学ボランティア活動支援センター
〒362-8585　埼玉県上尾市戸崎1番1号
TEL: 048-780-1705
FAX: 048-781-0094
URL: http://seig-vc.jimdo.com
E-mail: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp

学校法人聖学院は 2018 年 4 月、
グローバル・コンパクトに署名・加入し、
SDGs を目指した活動を行っています。